

国際理解教育研修会

令和元年度 在外教育施設派遣教員帰国報告会
(2019年度)



主催 兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会
共催 兵庫OV教員研究会 青年海外協力隊兵庫県OB会
後援 兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会 JICA関西

期日： 令和元（2019）年6月15日（土）

会場： JICA関西（神戸市中央区）



はじめに

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会 会長 高木 浩志

(宝塚市立逆瀬台小学校長)

日頃より兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会(兵海研)の諸活動・事業に対してご理解・ご協力を頂き、心より感謝申し上げます。私達兵海研は、在外教育施設への派遣経験をもとに、国際理解教育・帰国子女教育・多文化共生教育などの取り組みを推進しています。「兵庫から良い先生を送り出そう!」を合い言葉に、在外教育施設からの帰国教員による帰国報告会や多文化共生・国際教育セミナー(派遣希望者研修会)、派遣教員への支援活動、情報交換会等の諸事業に取り組んでいます。

さて、本日、ここに「国際理解教育研修会～令和元年度在外教育施設派遣教員帰国報告会～」を開催することができました。ご多用の中、在外教育施設並びに青年海外協力隊での実践を発表頂いた先生方、本研修会にご参加頂いた先生方、心よりお礼申し上げます。帰国教員の皆さん、海外での勤務、大変お疲れ様でした。国際政治や経済が不安定な中での海外勤務は、苦労や困難が多々あったことと思います。学校経営上の課題、教育活動上の課題、児童・生徒の多様化に関わる課題、そして「テロ」や「自然災害」「治安問題」「衛生問題」等安全に関わる課題など、国内では考えられない問題にも対応されたことでしょう。派遣教員の皆さんが責務を全うされ、無事に元気に帰国されたこと、私達も心から嬉しく思っています。そして、帰国後約2か月が経過し、今、激流ともいえる日本の教育の流れに日々奮闘されていることでしょう。「海外での勤務は遠い過去のことのよう・・・」と感じておられているかもしれません。「海外での貴重な経験を帰国後どのように活かしていくか」というのはとても難しい問題です。帰国後すぐに、今の学校やクラス、地域で活かすことができる・・・というほど簡単なものではありません。しかしながら、教育界もまた社会全体も、先生方の経験を求める方向に確実に進んでいます。グローバルな時代と言われる今日、多様な文化・価値観を尊重する態度や外国語・異文化への柔軟な対応力、国際的な人権感覚、自分の考えを持ち積極的に交流を図るコミュニケーション能力など、先生方が海外で身に付けられた資質・能力は、日本人全体、とりわけ未来に生きる子供達に求められるようになっていきます。グローバル人材の育成と文科省は、唱えています。

すでに皆さんもご存知のように、文部科学省や県教委、各市教委からは、全海研、兵海研に対して「派遣経験を国際理解教育や帰国子女教育、多文化共生教育の分野で活かして欲しい」という言葉を頂いています。多くの方々の期待に応えるべく、是非日々の教育をはじめ様々な場面で創意工夫しながら、海外での経験を活かして頂きたいと思っております。最後になりましたが、本研修会を実施するにあたり、JICA 関西をはじめ、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、兵庫県OV教員研究会、JOCV 兵庫OB会等、多くの方々のご支援・ご協力を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。今後とも、兵海研の諸事業にご理解とご協力を、よろしくお願い致します。

国際理解教育研修会

～令和元年度在外教育施設派遣教員 帰国報告会～

- 1 日 時 令和元年6月15日(土) 午前9時50分～午後5時15分
 2 場 所 JICA関西 (神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 TEL078-261-0341)
 3 日 程

- 9:30 受付
 9:50 開会行事
 (1) 開会あいさつ
 (2) 来賓あいさつ
 (3) 事務局より
 10:20 帰国報告(1人30分)

時刻/会場	2階 ブリーフィング室	2階 オリエンテーション室1・2
① 10:20	バンコク日本人学校 森安 祥平 多可町立加美中学校	/
② 10:50	ブラジル(青年海外協力隊) 濱澤 雄太 姫路市立中寺小学校	
③ 11:20	ナイロビ日本人学校 稲中 伸彦 宝塚市教育委員会	
④ 11:50	昼食(1時間)	
13:00	ローマ日本人学校(校長) 水井 廉雄 シニア派遣	ペナン日本人学校 田中 良枝 姫路市立林田中学校
⑤ 13:30	ブラジル(日系社会青年海外協力隊) 利山 彩 兵庫県立青雲高等学校	テヘラン日本人学校 織田 真弘 姫路市立夢前中学校
⑥ 14:00	ジャカルタ日本人学校 増田 恵津子 明石市立高丘中学校	ポゴタ日本人学校 樹下 幸代 播磨町立播磨南中学校
⑦ 14:30	バンコク日本人学校 加賀 悠士 明石市立清水小学校	日本メキシコ学院(総校長) 永田 博己 シニア派遣
15:00	休憩(10分間)	
⑧ 15:10	シアトル補習校(校長) 中野 龍文 丹波篠山市立城南小学校	マドリッド日本人学校 村山 次郎 丹波市立青垣小学校
⑨ 15:40	パラグアイ(青年海外協力隊) 松浦 由佳 神戸市立湊翔楠中学校	/
⑩ 16:10	ハノイ日本人学校 飯塚 恵子 川西市立緑台中学校	

※時間はおおよその目安です。また、都合により発表の順序を入れかえることがあります。

- 16:40 閉会行事
 (1) 閉会あいさつ
 (2) 事務局より

17:30 懇親会 (会場: JICA関西)

帰国報告書目次

(当日発表)

1	バンコク日本人学校	多可町立加美中学校	森安 祥平	1
2	JICA (ブラジル)	姫路市立中寺小学校	濱澤 雄太	3
3	ナイロビ日本人学校	宝塚市教育委員会	稲中 伸彦	5
4	ローマ日本人学校・校長	シニア派遣	水井 廉雄	7
5	ペナン日本人学校	姫路市立林田中学校	田中 良枝	9
6	JICA (ブラジル)	兵庫県立青雲高等学校	利山 彩	11
7	テヘラン日本人学校	姫路市立夢前中学校	織田 真弘	13
8	ジャカルタ日本人学校	明石市立高丘中学校	増田 恵津子	15
9	ボゴタ日本人学校	播磨町立播磨南中学校	樹下 幸代	17
10	バンコク日本人学校	明石市立清水小学校	加賀 悠士	19
11	日本メキシコ学院日本コース・総校長	シニア派遣	永田 博巳	21
12	シアトル補習校・校長	丹波篠山市立城南小学校	中野 龍文	23
13	マドリッド日本人学校	丹波市立青垣小学校	村山 次郎	25
14	JICA (パラグアイ共和国)	神戸市立湊翔楠中学校	松浦 由佳	27
15	ハノイ日本人学校	川西市立緑台中学校	飯塚 恵子	29

(紙面発表のみ)

16	台北日本人学校	神戸市立湊翔楠中学校	渡辺 裕史	31
17	香港日本人学校 香港校	西宮市立上甲子園中学校	肥後 綾子	33
18	シガポール日本人学校 小学部 チャンギ校	赤穂市立有年小学校	耳田 由美子	35
19	JICA (パラグアイ共和国)	南あわじ市沼島小学校	羽石 瑛	37
20	プラハ日本人学校	神戸市立摩耶小学校	黒田 智広	39

1 赴任地の概観

1887年9月26日「修好条約締結方ニ関スル宣言書」が調印されてから、130年が過ぎた。その後、1898年2月25日「日泰修好通商航海条約」が締結され、双方が互いを強く意識し、交流が深まるようになった。日タイ交流600年史、山田長政の功績から400年ということから考えても、日本とタイとのつながりは切っても切り離せないものがある。

タイ王国は、インドシナ半島のほぼ中央に位置し、陸ではマレーシア、ミャンマー、ラオス、カンボジアの4か国に囲まれ、海岸線ではタイ湾（シャム湾）とアンダマン海に面している。人口は6,672万人、面積は約51万4千km²で、日本のおよそ1.4倍の広さがある。そのうち農地面積は約40%で、日本の約4倍である。熱帯モンスーン



気候に属し、1年が雨期（6～10月）と乾期（11～5月）に、乾期はさらに寒季（11～2月）と暑季（3～5月）に分けられ、基本的には3つの季節がある。国花はドーク・ラーチャブルック（ゴールドデン・シャワー）と呼ばれ、3～5月頃鮮やかな黄色に咲き誇る。また、タイ語でチャーンと呼ばれる象は国獣として扱われている。

信教の自由は憲法で保障されているが、イスラム教（4%）、キリスト教（0.6%）などの信者はわずかで、国民の95%が仏教徒である。タイの仏教は、上座部仏教で、僧侶と俗人の区別が厳格であり、国中いたるところにお寺（ワット）があり、毎朝、黄衣をまとった僧侶に食べ物や花を捧げる人々の姿が見られる。これは「タンブン」と呼ばれており、この行為を積み重ねることにより、功德を積むことができると信じられている。

タイ国内は、一般的に「北部」「東北部」「中部」「南部」の4つに分けられる。古都チェンマイを中心に、灌漑設備の整った稲作が行われる北部タイ。ここにはミャンマーとの国境にかけて、少数民族が生活する山岳民族の村も多い。ラオスとの国境までに至る東北部タイは「イサーン」と呼ばれ、農業以外に目立った産業はない上、干ばつや洪水などの被害が多く、最も貧しい地域だ。中部タイは、チャオプラヤー川流域を中心とする地域で、肥沃な土壌でタイの穀倉地帯と言われている。その中心にある首都バンコクは、政治経済の中心で未だ成長を遂げる大都市である。マレー半島部の南部タイは、観光地として有名なプーケットやサムイなどの島々が点在している。

タイ王国の基礎はスコータイ王朝（1238～1376年）より築かれ、その後アユタヤ王朝（1350～1767年）、トンブリー王朝（1767～1782）を経て、現在のチャックリー王朝（1782～）に至る。

最近、タイでは日本語を第二外国語として学ぶ人が増えている。これは多くの日本企業がタイに進出していることと関係が深い。日系企業に就職するために日本語を学んでおけば有利だ、という考えがあるからである。他に、日本の漫画やアニメに興味を持って日本語を学びはじめた学生も多い。



2 赴任校の概要



本校は、大正15年（1926年）盤谷日本尋常小学校として設立された、世界一の歴史を誇る日本人学校である。戦争により昭和21年に一時学校閉鎖になったが、昭和31年「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」として再び開校された。その後、昭和49年には「泰日協会」を設置者として、タイ国学校法に基づき私立学校としての認可を得た。そして昭和57年、かつては「日本人学校通り」と呼ばれた現在地に移転し、40年近くを迎えようとしている。

児童生徒数約2,700人が在籍し、現在、新校舎となる6号棟を建設中である。日本人教師を含め、学校に携わる人数は220人にも上る。

現在は、大使館付属ではなくタイの私立学校として扱われているため、本来はタイ語の授業が週5時間必須となる。しかし、日本国籍を有する駐在員子弟の一時的学校としての特例を受け、週1時間の授業にとどまり、日本国内の小中学校と同等の教育を提供することができている。

3 特色ある教育実践

(1) 現地理解教育

① タイ現地校での出前授業

毎年夏期休業になると、タイ各地の現地校に100名を超える本校の日本人教師が出向き、タイ人の児童生徒向けに日本式の授業を行い、交流を図るという取組である。主に、教育未開拓といえる山岳民族の学校に通う子どもたちの現状や、教育（教育者）の重要性、並びに使命を再確認できる研修と言える。



② チェンマイ補習授業校の巡回指導

長期休業中に補習校へ出向き、現場に対し、私たち派遣教員のもてる教科指導の知識や技術を、実態やニーズに合わせ提供するものだ。学級のほとんどを占める二重国籍の子どもたちへのアイデンティティー確立の手助けや、特別支援の視点からの助言、進路先の確保は急務であることから、本校との継続したつながりの中で、彼らを少しでも支援していけるよう努めている。

(2) 特色ある学校行事

① タイ現地校との交流

本校中学部とチュラロンコーン大学附属中学校との交流は、今年で30回目を迎える。海外に身を置いているとはいえ、日本人学校の子どもたちは、なかなか現地で同年代の子と関わり合いをもつ機会がない。よって本校では小学1年生から中学1年まで、様々な現地校との交流をする中で、現地理解を図っている。

② ODA 学習

バンコク周辺のチャオプラヤー川に架かる橋の中には、日本からの円借款によって建設・補修されたものが13/15もある。これはODA学習の場面の一部である。教育だけではなく、日本はたくさんの技術や考え方をタイに輸出していて、あらゆる分野で貢献していることを知り、国際貢献について考える機会をもつことが目的である。また、日本は第2次世界大戦後に受けた無償援助（贈与）のおかげで成長を遂げた。援助される立場を卒業し、ODAの活動を通して世界へ恩返ししていることも学べる機会である。

③ 大運動会

小学部の運動会は、約2,200人の児童の家族が観覧に来ることから、当日は約1万人が本校グラウンドに集結する。タイムテーブル通りの進行と、我が子の出番を一目でも見ようと押しかける保護者の熱は、コンサート会場さながらである。人数が多すぎるため、小学部全体で実施するのが適切かという課題もあるが、本校の名物行事であることは間違いない。



④ 小中合同音楽朝会

以前まで小学部のみが取組であった音楽部朝会に、昨年度から中学部も加わり、小中連携を図っている。約2,700人の歌声は、他を魅了するものがある。

(3) 日本型教育の発信

① EDU-Port

文部科学省バックアップの下で始まった、東京学芸大学と共同で行うEDU-Portニッポン。日本型教育（問題解決型の授業）を算数科で実施し、事後研究会も含めてタイの教育関係者に提案するものである。問題解決型の授業を通して、タイの参観者も一緒になって考えている姿、授業後に行った事後研究会での意見交換が活発な様子は、日本が130年行っている授業研究の特徴と価値を、我々日本人教師が意識し、自覚する機会になった。



4 成果（派遣教員として得たもの）

3年間、現地の人々と共有した時間は、かけがえのないものであり日本では望んでもできないことばかりであった。上記のような特別なイベントだから得られた経験ばかりではなく、実は、最も身近に関わってきた本校のタイ人スタッフとの関係が、私を支えてきてくれたのかもしれない。「郷に入っては郷に従え」情熱をもち、未来を見通し変化に対応できる、そして、自らの意見をしっかりとちながら、話し合いを通じて折り合いをつけ共生しようとする人材こそが、これから私たち教育者が育てるべく、子どもの理想像だと確信した。

ブラジル ロンドリーナ めぐみ学園に赴任して

姫路市立中寺小学校 濱澤雄太

1 赴任地の概観

ブラジルは、南アメリカに位置する連邦共和制国家である。

南アメリカ大陸最大の面積を擁する国家であると同時にラテンアメリカ最大の領土、人口を擁する国家で、面積は世界第5位である。南北アメリカ大陸で唯一のポルトガル語圏の国であり、同時に世界最大のポルトガル語使用人口を擁する国でもある。

1908年に最初の本格的な集団移民、いわゆる「笠戸丸移民」が到着して以降、第一次世界大戦期や第二次世界大戦を経て、1950年代に日本政府の後援による移民が停止されるまでにブラジルに渡った日本人移民の子孫は5世、6世の世代になり、サンパウロの世界最大級の日本人街「リベルダージ」を中心に、海外で最大の日系人社会（約150万人）を持つなどブラジル社会に完全に溶け込んでいる。世界各国の中でも特に日本との縁が非常に深い国である。

2 赴任校の概要

学校の名称：めぐみ学園 所在地：パラナ州ロンドリーナ

※ロンドリーナ について

ロンドリーナ (*Londrina*) はブラジルのパラナ州北部にある都市。1930年にドイツ人移民と日本人移民によって造られたとされている。

パラナ州の中では州都クリチバに次いで日系人が多く暮らす都市であり、およそ2万人の日系人が居住している。そうした背景から、地方都市ながら日本とは兵庫県西宮市、沖縄県名護市の2都市との間で友好都市関係を結んでいる。人口は約53万人面積は1,724.7 km² (自分の地元姫路市と人口は同程度、面積は約3倍)

生徒数：幼稚部：100人 小学部：80人 習い事：50人

学校沿革：日本から移住した酒井夫妻が始めた学校。ブラジルと日本の良いところを合わせもった人を育てることを理念としている。夫妻の娘が現校長である。めぐみ学園に通っている生徒のほとんどが日系人子弟。日常生活での日本語使用はほとんどないため、日本語で話せる児童はほぼいない（挨拶や簡単な指示は分かる）。保護者は日本語教育や日本的な教育を希望し入学させている。

3 特色ある教育実践

(1) 日本語の会話授業

任地に赴任した当初は生活環境になれたり現地の学校生活について知ったり、学校で使われているポルトガル語を学んだりと生活をするだけで精一杯だったので、日本語の授業もアシスタントティーチャーとしての役割で働くことが多かった。ただ半年程度の日数が過ぎた時に自分でも授業を持ちたいという気持ちを持ち始め、90分授業のうちの30分間をいただいて会話の授業を単独でさせていただいた。フラッシュカードやカルタ遊び絵本の読み聞かせなど、椅子に座って学ぶ普段の日本語授業ではなく活動をしながら日本語を使い、遊びの中で日本語を使う中で気付いたら日本語が身につけることができているというような授業を目指した。日本語の授業を楽しいと直接伝えにきてくれる児童がいたり、休み時間に日本語を使っている場面を見ると日頃行なっている授業の成果が出たのだなと感じることができた。

(2) 日本の運動会を体験しよう！

卒業式では”日本”がテーマであったので3、4、5年生の発表内容の選定、発表の練習指導等全てを任せてもらえることとなった。日本の運動会でする演目【よさこい、ソーラン節、組体操】を題材として選択した。なぜならブラジルの方は組体操は一度も目にしたことがないと思ったからだ。これらを指導するにあたり”日本式の指導方法”を現地教師に紹介【指導する前に指導する事項や注意点を記した資料などを見せる等】しながら子ども達に指導することにした。このため日本の教師がどのように子ども達を指導しているのか紹介できた。めぐみ学園の先生方はその場で何事も決めて指導することが多い、数回先の授業計画まで記された日本で使う指導資料を見て驚いていた。もう一つの成果は、日本の運動会を卒業式にきていた保護者の方にも紹介できたことである。子どもたちだけでなく見に来ていた保護者の方々にも、今の日本の運動会でどのような表現運動が行われているかを紹介することができたことは成果の一つだと考える。

(3) 日本の小学生と交流しよう

日本で在籍している学校と交流活動を行なった。交流内容としては以下の通りである。1：動画交換による自己紹介、2：手紙の交換（日本語を使用する）3：お互いの国について質問をしあう。4：年賀状やクリスマスカードの交換。5：共同絵画プロジェクト。日系ブラジル人の子ども達は日本語を学んでいるが学習意欲も低く日本語を使う機会も少ない。日本語を使う機会があったとしても祖父母との会話で使う程度である。そのような中で日本語を使う機会を増やし使うことの必要性を感じてもらうために考えたのが日本の小学生との交流である。手紙を送ったり自己紹介をしたりと相手を意識して学習に取り組むことで学習意欲は非常に高まった。また言語だけでなくお互いの文化について知る良い機会にもなった。日本語が苦手な児童も絵画作成の時には目を輝かせて取り組んでいた。

4 成果（派遣教員として得たもの）

ブラジルという異文化の地で2年間過ごすことができたことは見識を広めるという点で非常に良い経験となった。また、ブラジルという世界最大の日系人コミュニティーを持つ国に派遣されたことによってブラジルが日本と縁深い国であることを知ることができたとともに、その昔ブラジルに移民として渡り大変な苦勞をされた日本人の方々の偉大さも学ぶこともできた。また日本人よりも日本らしく生きておられる日系人の方々や日本文化を大切にして生活しておられる1世や2世の方々を見て自分自身も日本文化を見直し、これから関わる生徒に伝えていかなければならないと感じさせられた。

任地の学校では日本語授業の補助や日本文化授業の実践が求められていた。会話授業の実践、日本文化の紹介、日本語授業の補助を通して任地から求められていた役割は果たすことができたのではないかと考える。ブラジルでの生活を通して人生を豊かにする上で大切なものは経済的な豊かさではなく、心の豊かさなのではないかと考えさせられた。

ナイロビ日本人学校に赴任して

～ナイロビだからできる一人ひとりが輝く学校をめざして～

宝塚市教育委員会 学校教育部 稲中 伸彦

1、ケニアの概要

ケニア共和国は、東アフリカ、赤道直下に位置する共和制国家である。北にエチオピア、北西に南スーダン、西にウガンダ、南にタンザニア、東にソマリアと国境を接し、南東はインド洋に面する。国土は 58.3 万平方キロメートル（日本の約 1.5 倍）、人口は 4,970 万人（日本の約 3 分の 1）である（2017 年：国連調査データ）。国民は 40 以上の民族、47 のカウンティ（日本の都道府県のイメージ）から構成されている。大都市を除くと、部族ごとに暮らしている傾向が強い。主な使用言語は母国語のスワヒリ語、公用語である英語、そしてそれぞれの部族語が使われている。旧イギリス植民地であり 1963 年に英国から独立、共和国となる。首都ナイロビ（人口約 390 万人）はマサイ族の言葉で「冷たい水」を意味する。四季はなく、雨季と乾季に分けられる。雨季は 3～5 月頃が大雨季、11～12 月頃が小雨季である。インド洋やヴィクトリア湖沿岸は年間平均気温が 26℃の熱帯性気候である。しかし、国土の大部分は、標高 1100m - 1800m の高原となっているため年間平均気温が 19℃の乾燥した高原サバンナ地帯となっている。最高地点は赤道が通るケニア山（標高 5199m）。エチオピアからタンザニアにかけて西部を走る大地溝帯は大地を切り裂いた壮大な地質形態でリフト・バレーと呼ばれる。多種の野生動物や野鳥の生息地としても世界的に有名な国である。



2、本校の概要

ナイロビ日本人学校はアフリカ、ケニアの首都であるナイロビ市に位置している。南緯 1 度付近に位置するナイロビは、人口 300 万人以上、標高が約 1660 メートルという高地に広がる大都市である。そのため赤道付近でありながら一年を通じて、比較的涼しく過ごしやすい気候である。市内にはニューヨーク、ジュネーブ、ウィーンと並び、国連事務局（国際連合環境計画・国際連合人間居住計画）がある中心都市として機能しながら、ナイロビ国立公園の自然が広がる場所でもある。高層ビル群をバックに、野生のキリンやサイ、ライオンが暮らす風景は、世界でも希少な都市風景である。そんなナイロビ市の郊外（カレン地区）に本校は位置している。設立は 1970 年 5 月 9 日で今年度（2019 年度）には開校 50 周年を迎える。児童生徒数は 18 名（2018 年度 3 月末）で小学 1 年生から中学 3 年生までの児童生徒が学んでいる。家庭は、長くケニアに住まわれている家庭もあれば、仕事で日本から赴任の家庭もある。また両親が日本人の家庭が半数以上ではあるがどちらかの親が日本人以外という家庭が 5 割弱という構成である。私が赴任した 2016 年 4 月時点では児童生徒は約 35 名であったが、一昨年（2017 年）のケニア大統領選挙による著しい治安悪化も影響し、減少傾向にある。2018 年度に入り、治安も正常化してきたが 2019 年 1 月 15 日に起こったリバーサイド地区のホテルで起きたテロ事件により再び緊張感に包まれており、本校教職員、保護者ともに児童生徒の安全第一を最優先事項とする共通理解の下、日々の教育活動に取り組んでいる。

3 特色ある教育実践

（1）ケニアの人的・環境的資源を最大限に活かした現地理解教育の充実

現地・国際理解教育の一環として、本校では現地校との交流活動や校外学習を活発に行っている。また中学部ではキャリア教育の一環として職場体験（ケニア版トライやるウィーク）も毎年数回行っている。各行事にも毎年現地校を招待して一緒に参加、発表する場を創出している。昨年度を例にとると、小 1～小 3 は「ケニアと日本の昔話」小 4～小 6 は「ケニアの友達をつくろう・ケニアの宝」をテーマに、継続的に近隣の現地校を「訪問・招待」した。それぞれ最終的には 10 月の学習発表会で現地校児童と共演した劇を発表した。中学部はキャリア教育として、一人ひとりの将来の目標に関連のある職場体験を積み重ね、現地の人々等から各職場のことを学んだ。最終的には各自が目標とす

る職業または生き方を設定し、自らプレゼンテーションソフトで10分間の発表にまとめ、学習発表会で発表しプレゼンテーション能力の育成に繋げた。

(2) 外国語教育の充実

小学1年～中学3年まで週4時間の英語を現地ネイティブ教員から系統性をもって学ぶ体制を構築(中学生は文科指定教科書で日本人教員と学ぶ英語科を入れると週7時間)。また上記のような現地理解教育の場面でも、公用語が英語である強みを生かして、児童生徒が英語を使う場面を多く設定している。どの児童生徒も英語の理解力、表現力、コミュニケーション能力が著しく伸びることを感じる。文部科学省の「We Can」(小3・小4外国語活動用)「Let's Try」(小5・小6英外国語教科用)は学年を前倒して活用することとした。ケニアではまだ普及していないデジタル教材が組み込まれていることも児童生徒には興味深く学習に取り組んでいる要因の1つである。学年や児童生徒の実態に合わせて、さらに高いレベルの教材も使用する前提でカリキュラムを作成した。また昨年度から新たな試みで「スピーチデイ」というスピーチ発表大会を設定してみた。そこでは小学1年生～中学3年生までが自分の表現したいこと、伝えたいことを英文にして、何度も何度も練習した。小学1年生～中学3年生まで、発達段階に合わせて発表内容は様々であるが全員が原稿を見ず、身振り手振り、強弱をつけて一生懸命、保護者や仲間に自分の言いたいことを英語で伝えるさまは聴く者に大きな感動を与えてくれた。

4 成果(派遣教員として得たもの)

今回の在外教育施設派遣で得たものは数えきれないが、集約すると主に4つある。1つ目はアフリカ、ケニアという日本とは環境の差異が大きな土地で暮らしながら教育に携われたことである。現地理解・国際理解教育を展開する中で、児童生徒と共に実に多くのことを学び、発見できた。2つ目は日本の様々な都道府県から派遣された教員と出会えたことである。自分は兵庫県の中学校教員としてのみ勤務してきた。今回、日本各地の教員と同僚として働く機会を得た。特に小学校教員としてのものの見方、授業の組み立て方、子どもたちへの話し方には多くの気づきや学びがあった。小学生に授業できたことも私には大きな財産となった。3つ目は、在外教育施設の管理職経験ができたことである。赴任時には想定していなかったことであるが、3年目に現地教頭職を拝命した。戸惑いもあったが、その役職を頂いたことで、日本人学校特有の管理職経験をすることができた。学校をさらに良くしていく為、学校運営運営委員の方々や協力して学校経営の場にも携わったり、治安悪化の為、外務省の学校強靱化外壁工事に携わり、大使館や地元建設業者の方々ややり取りしたりする機会も得ることができた。また日本人会やPTAの皆さんと教員をつなぐパイプ役として大運動会や日本人会のお祭り等、皆が笑顔で楽しめる行事を企画、準備、成功させる一助になれたことも大きな喜びとなった。4つ目は、ケニアで生活したことで現地に住む人々の価値観を学べたことである。日本は快適で、便利である。しかし日本はケニアより幸せな国なのか。3年間暮らしてみて、多くの日本の素晴らしい点を再認識した。しかしそれと同時にケニアの人々の暮らしの方がずっと人間らしい、と感じる場面も多かった。派遣前は正直、「日本はアフリカ、ケニアより優れた国だ。幸せな国だ。」と誤った見方、考えを抱いていた。しかし不便なことと不幸なことは違うし、豊さは物質的な側面だけでは決して判断できない、という考えてみれば当然なことをケニアでの生活を通してケニア人やケニアで出会った様々な方々から身をもって学んだ。

最後に、派遣期間の3年間は決して楽しいことばかりではなかった。3年間、治安は常に不安定であったし、外を歩くことすらできない生活であった。加えて2017年には大統領選挙による政情不安から市内各地でも相次ぐテロ行為や暴動が頻発した。家族がケニアでの生活に馴染むまでに様々な



障壁もあった。教育資材も限られているので日本での授業づくりより苦勞することも多かった。ただそれら全てを、現地で出会った学校関係者やケニアの人々、そして兵庫海外子女教育・国際理解教育研究会の方々をはじめ日本で見守ってくださっている皆さんのおかげで乗り越えることができた。あらためて人の絆の大切さを実感した3年間であった。今後は自分に与えられた場所で、この在外教育施設の経験を還元していきたいと考えている。

1 イタリア及びローマの概観

正式国名はイタリア共和国、首都はローマで国土面積は日本の約80%でおよそ30万km²、人口は約6000万人余りである。カトリック教徒が95%を占めるといわれており、世界最小国のバチカン市国がローマにある。民族構成はラテン系イタリア人であり、言語はイタリア語。北部の国境付近の街ではドイツ語やフランス語を話す。英語を話す人は少なく、ほとんどの国民がイタリア語と思われる。

イタリアの良いところは、食べ物が美味しい、人間性が明るい、気候が良い、世界遺産の数が世界一で観光名所が多く観光客が多いなどである。一方、良くないことといえば、いい加減でアバウト、役所では担当者によって対応が違う、街にはゴミが多く汚い、交通ルールは守らない等、自分勝手な人が多いなどであろうか。

また、首都ローマは、テヴェレ川のほとりに7つの丘が広がる永遠の都である。古代ローマの時代から歴史の舞台として様々なドラマが繰り広げられたローマは見所がいっぱいである。例えば

- ・古代ローマ皇帝アウレリウス帝の城壁に囲まれた歴史の街
- ・街の中心にヴェネツィア広場やナボナ広場などの名所が多く、観光客で賑わう。コロッセオ、トレビの泉、真実の口、フォロ・ロマーノ、パンテオン、カラカラ浴場など見所満載。
- ・2000年の時を経ても面影を残している旧アップピア街道など大幹線道路が四方八方に延びている。
- ・有名な言葉の「ローマは一日にして成らず」そのものである。

2 ローマ日本人学校の概要

ローマはイタリアの首都であり、世界有数の観光地である。この地にローマ日本人学校が日本国政府から正式に認可されたのは1990年（平成2年）であるから今年で29年目になる。2度ほど校舎移転をしているが、現在のカセッタマッテイに移転してから16年になる。

ローマは観光地なので、ミラノなどに比べて企業が少ないため日本人学校の児童生徒数も多いほうではない。これまで最も多いときで平成11年の全校生58名であった。ここ数年は漸減傾向にあり私が在職した3年間では、だいたい25人程度であった。本年度4月は過去最少の19人でのスタートである。

学校は都心部から10km程郊外の住宅地にあり静かなところである。都心部に比べて比較的治安も良いので生活もしやすい。派遣教員は全員学校の近くに住宅を借りる慣習になっているが、児童生徒の家庭は学校から遠距離にあるためスクールバス利用者がほとんどである。乗車時間の長い子で40分くらいである。

本校は、ローマ市及びその近郊に在住する日本人児童生徒に対し、イタリア共和国の関係諸法規の下に、日本国関係諸法規に準拠した教育課程により「豊かな人間性を持ち、たくましく国際社会に生きる日本人の育成」を教育目標として取り組んできた。

学校の設置母体はローマ日本人会で、運営はローマ日本人学校運営委員会であった。私立学校であるから保護者には高額な授業料をお願いしてきた（月額約7～8万円）。

3 特色ある教育実践

(1) ローマならではの教育

観光地として有名な所も多いローマなので、その名所を利用した教育活動を実践してきた。例えば、写生会はコロッセオ、バチカン、サンタンジェロ城などに出かけて行った。生活科や各教科（社会科や理科など）の校外学習も水道橋や美術館、博物館を利用してきた。芸術鑑賞会はオペラ座で本物のオペラやバレエ公演などを鑑賞し子ども達にとっては生涯忘れることがない貴重な経験をしている。

(2) イタリア語、英語活動、ECの授業

ECは全学年とも週1時間ネイティブの講師による授業を実施している。英語活動は10年程前から小学3、4年生は週1時間、5、6年生は週2時間を中学の英語担当教師が授業をしている。中学生の英語の授業は、日本の教育課程より時間数を多く実施し学力向上をめざしている。

また、イタリア語は全学年とも週1時間実施し、学習の成果を実体験するために学校近くのジェラート店などのお店や警察署に出かけることもある。

(3) 国際交流活動

現地校（ジャンツールコ校、ラサール校）やインターナショナル校（アンブリット校）との交流を年間で2、3回程度全学年とも実施した。1学期に本校に来てもらい交流し、2学期または3学期に相手校に出かけて交流する。こうすることで友だちが増えるし本校生が少しでも緊張感を和らげる効果を期待したのである。授業で学習したイタリア語や英語の活用はもちろんのこと、お互いの文化の交流も素晴らしい学習であった。本校は昔の遊び（コマ回し、おじゃみ、剣玉、紙飛行機、折り紙など）や習字、剣道、百人一首かるたなど準備して楽しく交流学習をした。

(4) 検定試験の受検を奨励

本校で受検可能なのは、英語検定、漢字検定、イタリア語検定の3つの検定試験であるが、さすがにイタリア語検定は難易度も高いので受検生は在留日本人や本校教員くらいであった。

英語検定は低学年には難しいので、中学年以上の児童及び中学生に放課後学習会を開設して受検を奨励してきた。また、漢字検定については、日本人としての自覚と誇りを強く持つためにも全校生に受検を呼びかけた。帰国するまでに必ず何級かの合格をしてほしいと強く呼びかけて受検を奨励した。各学級担任が過去問などを利用して子ども達の士気を高めてきた結果、全校児童生徒が何級かに合格し取組の成果が現れた。

(5) 特別支援を要する児童生徒の本校への受け入れ

100校近くある日本人学校の中で文部科学省から特別支援学級を認可されているのは僅か6校である。欧州では認可校はゼロであった（一時期に認可された学校もあったが2018年当時はゼロ）。しかし、近年特別支援を要する児童または生徒の日本人学校への入学（編入）を希望する者が増加している。本校にも2名（重度の知的障害生徒とダウン症の生徒）が編入を希望したが、これまで受け入れた実績もなく、さらに派遣教員は学級担任業務でほとんど空き時間もなく担当不可能であった。学校の経営状況から新規に講師の採用も困難であったので、当初はお断りせざるを得なかった。しかし、保護者の強い要望もあったので文科省とも相談し、学校運営委員会でも協議をして半年後に受け入れを決断した。ただし条件として保護者負担のサポーター（8時から16時まで勤務、授業担当も個別指導で行う）を付けていただくとした。欧州地区の他校との情報交換の結果でも、この件は苦慮しているとのことである。

4 成果（派遣教員として得たもの）

- ・管理職として公務以外でも責任ある言動が求められること。
 - 犯罪に巻き込まれないこと、交通事故を起こさない、日々緊張を持った生活をするなど。
- ・いつもリーダーであること。率先垂範を忘れないこと。
 - 学校行事の準備や片付け、学校の清掃美化、校内研修会など
- ・素直な子ども達の成長のためにも、行き届いた教育指導をおこなうこと。
 - 教材研究の徹底、指導時の適切な言動、保護者からの信頼、レベルの高い授業など
- ・人間関係を大切にすること。
 - 大使館、企業の方々との交流、保護者や在留日本人の方々との交流など、自己中心の考えを出さずに常に誠意ある応対に心掛ける
- ・児童生徒に日本人としてのアイデンティティを育てること。
 - 日本人としての自覚、誇りを持った人間を育成。（学校行事や授業、国際交流、校外学習などで）
- ・派遣教員は期待されていることの自覚を大切に。
 - 派遣教員は授業力、人間性、事務能力など高い能力が要求される。勿論、それらの能力を十分もった優秀な教員が多く派遣されている。しかし、最近では教員の資質能力において心配な先生も少なからずいて学校関係役員や保護者からクレームが出るケースもある。任務を終えて帰国された先生の後任はどのような先生かを気にされ期待されていることに気づかされる。しっかりとした信念を持ち、その信念を派遣中も貫き、派遣教員としての使命を果たす先生が要求されている。
- ・自分の特技を披露したり、イタリア人にも指導。
 - 小倉百人一首競技かるたを子ども達、保護者に指導、さらに、日本語が理解出来るイタリア人教員にも指導が叶った。ローマにイタリア人達のかかるた同好会も設立できた。

マレーシア ペナン日本人学校に赴任して

姫路市立林田中学校 田中良枝

1. 赴任地（国）の概観

マレーシアは、東南アジアに位置し、東マレーシア・西マレーシアに分かれている。過去にインドネシア諸国より移住してきた民族（マレー系）が多く占める国である。マレー系・中国系・インド系などの民族が共に暮らしている。また、現在も原住民族「オラン アスリ」といわれる人々が存在し、ジャングルで昔ながらの生活を送るグループもあれば、現代社会に適応した生活を送っているグループもいる。



小学校は日本と同じ6年間で、国民小学校（マレー語）と国民型小学校（中国語・タミル語）がある。国民小学校の児童は、マレー語・英語が必須、国民型小学校ではマレー語・英語に加え、それぞれの民族の言語（中国語・タミル語）で授業が行われる。義務教育では主に公立学校・民族学校（中国学校・タミル学校）・インターナショナル校があり、民族学校ではマレー語・英語を利用して授業が行われる。国民型小学校はそれぞれの母語を学ぶ授業もあり、国民小学校で学ぶ児童・生徒に比べて学ぶことは多い。

ペナン州は、人口約70万人の亀の形をした小さな島である。「ペナン」の名はヤシ科のビンロウ樹 [pinang] から由来している。18世紀にイギリスの東インド会社が東南アジアに進出する拠点としてペナン島を選んだことから始まり、東西貿易の中継地として発展する過程で西洋、中国、インド、イスラム圏の文化が融合した独特な文化を生み出すに至った。マレー人、中国人、インド人が人口の大部分を占める。宗教はイスラム教、仏教、ヒンドゥー教と異なるがそれぞれの違いを認め合い、宗教対立などの大きな争いがおこることはない。

英語教育は、東インド会社時代には英語による教育が行われたが、独立時代にはマレー語が国語としての動きが高まったため、教育現場では主にマレー語を使った授業となり、英語話者が減少した。しかし現代になり、英語の重要性が高まり、教育の場で英語を使った授業が増加することになった。



2. ペナン日本人学校の概要

1974年に設立され、同敷地内に小学部・中学部があり、それぞれ単学級の全校児童生徒合計約170名の小中一貫校である。

メソジスト教会の施設を借りているが、老朽化や洪水の被害も大きく移設案が数年前より浮上している。現在はIS対策として学校周囲壁建設が昨年度より実施され、現在も学校を全方向から覆う形で建設が行われている。運動会・文化祭・現地交流など様々な行事の場で児童生徒がお互いに協力しあっている。



3. 特色ある教育実践

学校教育目標「かがやき」

教育目標は、か・・・考える子、が・・・がんばる子、や・・・やさしい子、き・・・協力する子の育成を目指している。

(1) 能力別英会話授業

ペナンはマレー語だけでなく、英語を使う機会が多く子供たちの英会話能力育成に力をいれている。能力別に3～4クラスに分けられ、小学生は週に2回、中学生は週に1回の英会話の授業が行われている。中国人とマレー人教師による英会話を中心とした授業である。また年に2度学校で行う英検に合格を目指して、英語への意欲を高める児童生徒も多い。小学生低学年でも英検2級を取得している児童もいる。

(2) 水泳授業

1年を通して水泳の授業が毎週1回行われており、中国人コーチ・体育教師・担当学年教師による能力に合わせた指導が行われている。入学・編入時は水泳の苦手な児童生徒も、毎週の授業で鍛えられ、実力をぐんぐんと伸ばしていく。水泳記録会も実施し、一年間の児童生徒の練習の成果を見てもらう保護者観覧の会も年に一度行っている。また小学部5・6年生はインターナショナル校との水泳交流記録会を行い、水泳を通じた現地交流も行っている。

(3) 国際交流

各学年部に応じた現地の学校との交流会を毎年行っている。小学部1・2年生はインターナショナル校と現地大学(USM 大学)の児童生徒、小学部3・4年生はインターナショナル校、5・6年生はインターナショナル校、中学部1～3年生は現地中学校(日本語コース受講者)と交流を行っている。隔年で来校・訪問を交替し、訪問時には各国の文化について紹介したり、経験したりしている。また来校時には、日本の昔の遊びや文化、食べ物について教えるブースを用意して英語で説明するため、日本について自分たちも学ぶ機会になっている。

(4) マレー語講座

ESL 教師(マレー人)による児童・生徒への基本的なマレー語、文化についての講座を毎年1回以上行っている。校外学習・移動教室・修学旅行・現地校交流前にはマレー語の挨拶・買い物の仕方などを学ぶことで、より現地理解を深める学習をしている。またUSM大学の日本語コースの大学生が本校に来校してマレー語を全児童生徒に教えている。

(5) 小中一貫教育

小学部・中学部が同敷地内に存在しているため、行事や集会は合同で行うことが多い。体育大会では、紅白グループに全校児童生徒が分かれ中学生リーダーの指示の下、ダンス練習を行っている。普段の生活においても、各バスのリーダーや清掃の班長などに中学生がなって、小学生の面倒やかかわりを深く持っている。また休憩時間には小学生低学年児童が中学生のクラスを訪れ、一緒に遊んでもらう姿がよく見られる。

4. 成果と課題(派遣教員として得たもの)

小学部・中学部が同敷地内にあることで、それぞれの学年に応じた成長段階を身近にみることもできた。小学生へ学習指導・生徒指導の仕方について日々学ぶ中で、どのような伝え方・教え方をすると分かりやすいのかということについて深める機会をもてた。

日本全国から教師が集まっているため、指導方法についてもお互いに議論したり、アイデアを出し合ったりする中でお互いを高めあえた。また児童・生徒から出身地の学校の様子や特色あるカリキュラムを聞くことで自身の授業に役立てることもあった。

ペナンは多文化共生社会で、日本と比べて違いを認める視野の広さや他者を理解しようとする歩み寄りの姿勢が様々な場面で見られた。世界市民として、日本の児童生徒が他者との違いを受け入れながら、共に暮らす社会を築けるように、3年間の派遣経験を活かしていきたい。

ブラジル「全日制ジョゼフィーナ・デ・メロ学校」に赴任して
～アマゾン・ジャングルでの日本語教育（日本人学校との関わりを通して）～

JICA 日系社会青年ボランティア
兵庫県立青雲高等学校 利山 彩

1 赴任地の概観

活動地域であるマナウス市はブラジル北部アマゾナス州の州都であり、世界最大の流域面積を誇るアマゾン川流域に位置する。年間降雨量 2,500mm を越える高温多湿の多雨熱帯樹林気候であり、赴任中、服やタオルやカバンがいくつもカビた。季節は大きく雨季（雨の多い時期：12月～3月）と乾季（比較的雨の少ない時期：6月～9月）に分かれる。

人口は200万人を超え、ブラジルのアマゾン地域最大の都市であるが、ブラジル国内の主要都市へは空路あるいは水路以外に交通手段がなく、陸の孤島である。マナウスフリーゾーンとして指定されているため、近年はホンダ・ヤマハなど日本の大企業その他、韓国やアメリカの企業の進出も目立っている。しかしその一方で、慢性的な交通渋滞・治安悪化などの問題も抱えている。人種的には、先住民であるインディオとポルトガル系を中心としたラテン系との混血が80%を占めている。日系人も多く住むが、現在は3世4世代へと変わり、日本語を話す人は多くない。



2 赴任校の概要

配属先は全日制的小中一貫校であり、キリスト教系の学校である。系列に幼稚園も設置されている。1986年、日本人移民の子弟の教育支援という目的で設立された。そのため小学1年から日本語が必修になっており、その他ポルトガル語、スペイン語、英語が必修である。また、水泳、柔道、美術、音楽などの情操教育や、生徒指導的側面を大事にした日本的な教育が評判を呼び、現地ブラジル人生徒が増え、現在、生徒数は約400名、同僚の職員も100名を超える規模となっている。日系人は1割程度であり、日本語を話せる生徒はいない。一般的なブラジルの学校は半日制であるが、本校は朝7時15分から16時半までの全日制であることは大きな特徴である。

園児・児童・生徒は、先住民であるインディオ系、ヨーロッパからの移民をルーツに持つポルトガル



系、アフリカ奴隷をルーツに持つアフリカ系、そして日本人移民をルーツとする日系人など、肌の色、目の色、髪の色、全てが異なる子どもたちが同じ教室で学ぶ。校舎の裏をアマゾン川の支流が流れ、校内でワニやイグアナなどを見かけることができる自然豊かな学校である。

歩いて5分ほどのところにマナウス日本人学校があり、年数回交流がある。

3 活動内容

主な要請内容は、「日本語・日本文化を伝える」ということで、必修の日本語の授業を担当した。また、水泳授業のアシスタントや、幼稚園では日本語活動の他に体育の授業も担当し、週の持ち時間数は35コマを数え、日本の教員生活よりも忙しかったが、とても充実した日々であった。

1年8か月を通してさまざまな活動を行ったが、今回は特に日本人学校と関係する活動についてまとめたい。

(1) 交流会

5月は本校生徒が日本人学校に招いてもらい、スポーツで交流したり、日本文化を紹介してもらう。11月は日本人学校の生徒を本校に招き、ブラジルのゲームなどの活動を行う。本校の生徒はこの行事で日本人学校に行くことを大変楽しみにしている。日本語で自己紹介をするため、学んだ日本語を使う場となっている。また、終了後、日本人学校の生徒からの手紙をわたすと、生徒たちは目を輝かせて喜んでいて。日本語、ポルトガル語、または英語で書いてくれるので、ブラジル人生徒も、ポルトガル語英語、日本語で返事を書いた。日本語だけでなく、世界共通の言語である英語の必要性も実感する機会になった。生徒は日本人の友達がほしいと強く思っている。

(2) 日本人学校生徒のお宅訪問

交流で仲良くなり、日本人学校生徒のご自宅を訪問させてもらい、一緒にたこ焼きをつくったりした。生徒は本物の日本食のおいしさに感動していた。生徒同士、日本語、英語、ポルトガル語で会話し、「もっと語学を頑張りたい」という思いを新たにしていた。日本人学校の保護者の方からも「娘に初めてブラジル人の友達ができた」と喜んでいただいた。



(3) 日本人学校の先生のご家族による日本文化授業

日本人学校の先生以外に、ご家族の方も学校に招き、日本文化（遊びや調理など）の授業をしていただいたり、ソーラン節を教えていただいたりなどの活動を継続して行った。生きた日本語や日本文化に触れるよい機会となった。ソーラン節は終業式で発表し、本校生徒をはじめ、職員や保護者にも見てもらい大喝采を浴びた。

(4) 日本人学校6年生での JICA 紹介授業

日本人学校に招いてもらい、6年生の社会科の授業で国際協力や JICA について授業をさせていただいた。現職教員として、帰国後の生徒への還元が重要だと考えていたが、活動中からその機会を与えていただきありがたかった。

4 成果

最初は言葉も通じず、生徒とも同僚職員とも意思疎通できずつらかったが、一生懸命教材研究し、いい授業を工夫し続けることで生徒はついてきてくれるということ、を、改めて実感することができた。地球の反対側でも、人種や言葉が違って、生徒はとてもかわいく、学校の先生はとても幸せな仕事だと思える2年間であった。



テヘラン日本人学校に赴任して

姫路市立夢前中学校 織田 真弘

1 赴任地の概観

イラン(正式名称イラン・イスラム共和国)は、日本から約7600km離れた中東にある国である。日本のアニメやドラマも流行しており、親日的なイラン人が多い。イランはかつてペルシャと呼ばれ、その歴史の発祥は紀元前までさかのぼり、紀元前5世紀にはアケメネス朝ペルシャがイラン最古の王朝として栄えていた。その当時の都であったペルセポリス等、イラン各地に世界遺産が多く点在している。アケメネス朝ペルシャやササン朝ペルシャなどのペルシャ帝国が反映した時期と、マケドニア、モンゴル、イスラムの侵略を受けて衰退していく時代を繰り返しながらも、イラン人は独自の国家を形成していった。日本とのつながりも深く、奈良時代にペルシャより伝わった白瑠璃碗が東大寺正倉院に納められている。また、イギリスによる経済制裁・石油禁輸措置の中、日本のタンカーが石油を買い付けにペルシャ湾岸のアバダーンという町まで行ったこともあった。長い歴史の末、1935年には国名をペルシャからイランに改めた。そして1979年にルーホッラー・ホメイニー師によるイラン・イスラム革命が起こり、宗教上の最高指導者が国の最高権力を持つイスラム共和制の国が成立し、現在に至る。イスラム教シーア派の国として新しく政治を行うようになったため、イスラム教シーア派に由来する行事も増えた。国教としてイスラム教を信仰している一方、イラン発祥であるゾロアスター教やキリスト教を信仰している人もあり、ゾロアスター教寺院や教会も見られる。

イランの国土は日本の約4.4倍と広く、北のカスピ海周辺や南のペルシャ湾周辺以外の地域は、1年を通して非常に乾燥しており、夏場は気温が40度を超えることもある。

日本人学校のある首都テヘラン市は、アルボルズ山脈南に位置した高原にある。「チェナール」と呼ばれる「すずかけ」の街路樹が縦横に並ぶなか、市街には近代的な高層ビルが立ち並び、緑に囲まれた公園も多く、とても砂漠の中の都市とは思えない。テヘランの人口は毎年増加しており、1200万人を超える世界有数の大都市となっており、それに伴ってテヘラン市の規模も広がり続けている。



2 テヘラン日本人学校の概要

テヘラン日本人学校の正式名称は、在イラン日本国大使館附属日本人学校といい、1969年に開校された歴史ある学校である。平成30年11月23日には50周年記念式典を行った。日本では同窓会が開かれ、これまで在籍した児童生徒、その家族、派遣教員等が参加した。現在は小規模になってきているため、小学部1年生から中学部3年生まで在籍しているものの、児童生徒数は20名前後である。そして、クラスは小学部の1年生クラス、2年生クラス(年度によっては1・2年クラス)、3・4年生クラス、5・6年生クラスと中学部クラスで編成されている。教職員は、派遣教員7名、現地スタッフ4名、ALT2名の13名となっている。

学校の環境については、日本と比べると非常に厳しく、イラン政府が外国人の土地所有権を基本的に認めていないためイラン人の別荘だった建物を借りて校舎として使っている。そのため、学校としての設備の維持が難しく、さらに校舎、校庭の広さは十分とはいえない状況である。また、イランの経済が国際情勢に左右されることが非常に多く、経済制裁の影響を大きく受けるのも特徴の1つである。前回のアメリカによる経済制裁時には、児童生徒数は8名にまで減少した。



3 特色ある教育実践

(1) 現地理解教育

テヘラン日本人学校の現地理解教育には、宿泊学習、伝統工芸等がある。宿泊学習では、ハマダーン（紀元前に繁栄していた町）、カーシャーン（バラ水が有名）、ラムサール（ラムサール条約提携の地）を訪れ、各地の遺跡や伝統工芸を学習する。有名なエスファハーンやシラーズは、家族旅行の候補地となるため、これら以外の場所を宿泊学習の候補地としている。訪問先では、現地のイラン人講師から伝統工芸（陶器や芦細工など、各地域で特徴的なもの）を学び、実際に体験する。小学部3年生以上の参加となっており、得ることの多い3日間となる。また、テヘランにある伝統工芸博物館に講師の派遣を依頼し、美術の時間に伝統工芸を学習することもある。この授業は小学部1年生からオールイングリッシュで行われるため、イマージョン教育の一環となっている。



(2) インターナショナルスクールとの交流

テヘラン市内には、数は少ないがインターナショナルスクールがある。テヘラン日本人学校では毎年ジャーマンスクールとパキスタンスクールとの交流を行い、折り紙やけん玉等を英語で紹介する。こちらも小学部3年生以上の参加になっている。最初は外国人と話すことや英語で話すことに戸惑う場面も見られるが、約2時間の交流を通して交流を深め、最後は英語で楽しそうに会話をする姿が見られた。イラン人の多くが英語で会話することが苦手なため、英語を話す数少ない機会である。



(3) ペルシャ語の授業

テヘラン日本人学校では、週に1時間ペルシャ語の授業がある。小学部1年生から参加するため、派遣教員とALTが協力して授業を展開している。簡単なあいさつから日常生活で活用できるペルシャ語まで1年を通して幅広く学習する。そして12月初旬にはバザールでの買い物研修を実施し、授業で学習したペルシャ語を実際に使って買い物をする。ペルシャ語には、日本語にも英語にもない発音も含まれているが、児童生徒は一所懸命に練習してイラン人と話をする。そして、イランに来てから学習したペルシャ語にも自信を持って話そうという姿勢がみられるようになっていく。



4 成果

テヘラン日本人学校での3年間を通して、イランの歴史やペルシャ語を学ぶことで、イランの文化やイラン人の考え方、民族性を知ることができた。そして、教師自身が学ぶことでイランを知ることの喜びを児童生徒にも伝え、ときには一緒に学ぶ喜びを共有できた。児童生徒の大半が、転入時にはイランに対して好印象を持っていなかったが、彼らも“本当の”イランを知ることによって大きく変わっていった。もちろん、派遣教員が少ないということで社会や技術、体育などの教科外の教科を教えるという負担はあったが、児童生徒たちと一緒にイランを学べたことが非常に大きかったと感じる。

日本に帰国すると、残念ながら中東やイランについての情報はまだまだ少なく、危険な国や地域というイメージだけが強いことに改めて気づかされた。インターネットの普及やオリンピック開催を目前にし、さらに国際化が進む中でこの3年間の経験を活かし、日本の生徒たちにも“本当の”イランを伝え、正しく、幅広い視野を持って世界でも活躍できる生徒を育てていきたいと強く感じる。

「多様性の中の統一」 ジャカルタ日本人学校に赴任して

明石市立高丘中学校 増田恵津子

1, 赴任地の概観

「多様性の中の統一」。インドネシアを一言で表す言葉である。赤道にまたがる1万を超える島々。面積は日本の約5倍。人口は約2億4900万人。300にもなる民族がいる多民族国家であるインドネシア。90パーセント近くがイスラム教で、世界最大。キリスト教、ヒンズー教、仏教なども信仰され宗教的な多様性もある。インドネシア共和国が誕生したのは、第二次世界大戦後で、それまでは様々な国家が興り、オランダが植民地支配し、日本軍による侵攻もあった。それぞれの民族の歴史や文化の多様性を認めながら、現在の国としての統一への思いが神鳥ガルダの国是パンチャシラに表れている。

ジャカルタはインドネシア共和国の首都で、政治や経済の中心地である。人口は約3120万人で、東京に次いで世界第2位。ASEAN（東南アジア諸国連合）の事務局が置かれている。気候は熱帯性気候で、季節は雨季と乾季に分かれる。

2, 赴任校の概要

ジャカルタ日本人学校は2019年に創立50周年を迎えた小中一貫校である。児童生徒数は1052人、全38クラスで、総教職員122名の大規模校である。ジャカルタ日本人学校では、毎学期ごとに緊急一斉下校の訓練を行っている。児童生徒たちは共に同じスクールバスで通学しているが、緊急一斉下校時は教師も一緒にバスに乗り込み、全員が家にたどり着くのを確認する。バス内では学校と無線で数回やり取りをし、安全確認を行う。大規模デモや雨季の大雨による洪水などの影響を考慮して、実際に緊急一斉下校が行われることもある。大規模校なので、スクールバスの数も約60台になる。



3, 特色ある教育実践



(1) 現地校交流

ジャカルタ日本人学校では、小学部中学部すべての学年において、発達段階に応じた現地校交流を毎年行っている。それぞれの文化を互いに伝え合い、親睦を深めている。中学部全体では年に一度「日本インドネシア友好親善スクール」を行い、3校の現地校の生徒を招き、生徒たち自身が企画運営する異文化交流を行っている。写真は中学部3年生が伝統的なダンスを教えてもらっている様子である。

(2) 小中一貫教育

小学部と中学部の教職員が一つの職員室で執務するので、常に児童生徒の情報交換ができるという利点がある。分掌も小学部と中学部それぞれの教職員から成り立っており、校外の研修も共に行っている。また、入学式などの式典も同じ体育館で同時に挙行している。主な小中一貫の行事は JJS フェスティバルと体育祭である。特に圧巻なのは全校生 1000 人規模で行う色別体育祭の応援団である。中学部 3 年生から 5 色の応援団長が決まり、小学部 1 年生から 9 学年が息を合わせての応援合戦を披露する。上級生が下級生のクラスに赴いて応援歌やダンスを教える縦割りの取組が行われている。



4, 派遣教員として得たもの

(1) 原籍校との交流

私は日本の原籍校の HP に「ジャカルタを吹く風」というコーナーをもち、毎週、現地で体験したことや起こった出来事を写真と共に掲載してきた。2 年間で約 100 号に及ぶ。原籍校ではそれらの記事を社会科の授業で活用してくれた。また、ジャカルタ日本人学校の総合的な学習の時間で作成したインドネシア新聞を原籍校の生徒たちに送ることもできた。原籍校では新聞の感想を書くことを国語科の授業で取り組み、それらを再びジャカルタ日本人学校に送るといった交流をもつことができた。一緒に「雪が降らない国ジャカルタへ」という題でスキー新聞も送られて来た。教師がインドネシアの様子を伝えるよりも、同じ中学生同士が伝え合う方が、断然興味関心を持つ。また、スマホ時代と言われるが、あえて郵便を使うことで、封を開ける楽しみを生徒たちと味わえたのも良かった。教科書で学ぶ外国について、その国で生きる人たちを知るとはどういうことかを日本にいる中学生に伝えることができたと感じている。以上の教育実践を『月刊 兵庫教育 (2017 12 月号)』の紙面で発表できたことを感謝している。

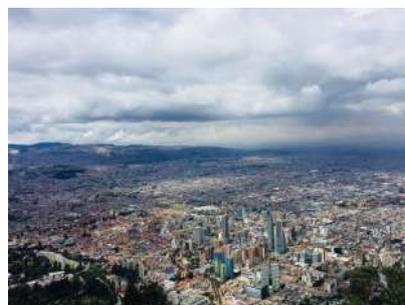
(2) 日本人学校の役割

海外子女教育振興財団グローバル教師 2018 年度「教育実践研究」支援プロジェクトに参加する機会をもった。東京学芸大学附属国際中等教育学校の先生を招き、中学部 2 年生の国語科「平家物語」の単元において、国際バカロレアのプログラムの実践に則した支援をしていただくことができた。これは、自身の授業力向上だけではなく、ジャカルタ日本人学校で勤務する教員も多くのことを学ぶきっかけとなった。我が国の教育システムは世界に誇るべき素晴らしさをもっている。それは学習指導要領のきめ細かさや、教授の丁寧さであると感じる。それらのことを再度確認することができた。自身も海外駐在経験があり、日本の義務教育の良さを他国の教育システムと比較して感心した経験がある。そのような教育を海外に輸出していくというプロジェクトはまさに在外教育施設の在り方を世界に発信していくことに他ならないということに大いに興味をもった。国語科の授業改善だけではなく、在外教育施設で育った生徒たちの行く末について考えたり、日本の教育システムを相対的に考えたりする機会をいただけて感謝している。

1 コロンビア共和国の概要

南米の北部に位置するコロンビアは、国土が1,139,000 km²（日本の約3倍）、4,907万人（日本の約3分の1）、コスタ（カリブ海沿岸）、アマゾナス、アンデスなどの南米文化とスペイン文化など様々な文化が混ざりあった国である。特産品は、コーヒー、石油、石炭、日本へも輸出が多い切り花、エメラルドなどがある。

公用語はスペイン語で、英語を使える人は、かなり少数の高学歴の人に限る印象であった。宗教は主にキリスト教カトリックが多く、日曜は礼拝で多くの人がボゴタのモンセラテの丘に集まる。（写真はモンセラテの丘からのボゴタ市）



首都のボゴタ市は標高約2700mに位置し、若干運動すると息が苦しくなる。また山岳地方特有の、ゲリラ豪雨や雹などが降ることもあるが、基本的には「常春」と言われる気候で暑くも寒くもなく、過ごしやすい。ボゴタ市は、地区によって「エストラート」と呼ばれる経済区域に分かれており、公共料金や賃貸の価格に影響している。

麻薬や凶悪犯罪のイメージが強いコロンビアだが、事実裏社会での麻薬取引は横行しているようだ。しかしながら、近年の経済成長に伴い、一進一退しながらも治安は若干の改善傾向にあり、2016年には、反政府ゲリラのFARC（ファルク）と当時のサントス政権との間で和平交渉がもたれ、その後のカルタヘナでの和平合意により、ゲリラとの間で約50年続いた冷戦状態が事実上終結した。しかし、ゲリラに家族を奪われた国民はこの和平合意に未だ納得しきっておらず、デモや小規模のテロなどが和平合意後も続いている。ごく最近では、隣国ベネズエラの経済危機により、ベネズエラから多くの難民が押し寄せしており、因果関係は定かではないが、犯罪率も増加しているようである。

また、日本との関係では、2018年に外交関係110周年の佳節を迎え、1年間に渡って様々なレセプションが開かれた。日本人学校の生徒たちも、大使館を通してそのような行事に参加させていただき、日コロの外交の重要性に触れることができた。

2 赴任校の概要

ボゴタ日本人学校は、生徒数15～20名程度の小さな学校である。私が勤務していた当時は、ほとんどが日系企業や大使館の駐在員の子で、残りが現地在住の日本人を親にもつ子女であった。派遣教員は7名、現地採用の教員が1名、事務員や用務員、警備員、バス運転手などの現地職員が10名程度勤務している。中学部の生徒は、部活動や友人関係の構築、受験対策などを懸念し、帰国する家庭が多いためほとんど在籍しておらず、1～3名程度を推移している。治安の関係上、教員にはエスコルタと呼ばれる警備員がつき、出退勤時や外出時には必ず一緒に外出するように決められている。学校の避難訓練では、バスジャックやテロを想定した訓練も行う。生徒たちも、普段は治安上、単独で外出することができず、学校に来た時に唯一友達と触れ合えるため、皆学校に来ることをとても楽しみにしている印象であった。



校舎は、体育館や特別教室、図書室、グラウンドなどほぼ日本と遜色なく設置されており、温室で日本の野菜を育てたり、芝生の中庭で大好きなサッカーをして子供たちは楽しんでいました。日系企業の駐在員の子が多いため、転出入が激しく、学期毎に涙ながらのお別れ会が開かれていたのは、日本人学校の特徴であると言える。

6月にあるボゴタ大運動会では、コロンビア国内の日本人や日系企業関係者が一同に集い、交流し、日本の運動会を大いに楽しんでいる。コロンビア国内のJICA隊員の皆さんには用具出しや欠員補填などで大変お世話になった。

3 特色ある教育実践

少人数でも行き届いた教育ができるように、できる限り複式学級を解消しカリキュラムが遂行されている。また、日本文化の継承の為に、各月ごとに様々な定例行事が予定されている。児童生徒会が中心となり、それらの行事を行っている。ハロウィン会では、朝から教員も児童生徒も仮装をし、授業を行うなど海外の文化も味わえるようになっていた。修学旅行はアマゾンへ。民族集落訪問やアマゾンの川下りを体験した。

(1) 英会話

スペイン語・英語の外国語教育にも力を入れており、小学部1年生から週2時間、小学部3年からは週3時間外国語の授業が行われる。スペイン語に関しては、日常的な会話はほとんどの生徒が身につけていく。スペイン語の学習を披露する場としては、各行事でのスペイン語ナレーションを児童生徒が行ったり、現地校交流会などで自分の能力を確認することができる。一方、英会話に関しては、英語圏でないため、帰国子女入試などに対応できるだけの英語力を身につけさせることが保護者や理事会からの要望で上がった。そのため、英会話のクラス数を増やし、習熟度別に生徒に沿ったレベルの教育ができるように、予算立てや教員確保を行った。小学部卒業時に英検5級、中学部卒業時に2級を目指すという目標で取り組んでいる。

(2) コロンビア学習



総合学習として、それぞれがテーマを決め、1年間の調べ学習や現地調査を行っていく。小学部では、コロンビアのコーヒーについて、コロンビアの花やフルーツについて、中学部では、コロンビアのストリートアート、FARCに対する国民感情などをテーマに、現地人へのアンケート調査や調べ学習を行い、仮説を検証し、自分なりの見解を発表した。最終発表は、「コロンビア学習発表会」として、大使や邦人企業の方々にも参加いただき、意見交換などを行っている。この研究を通して、統計学の基礎や、論理展開の仕方、プレゼンテーションの工夫なども学習する。

(3) ようこそ先生！

現地の法人企業の方にお越しいただき、仕事内容や、それぞれの分野からの講義をいただく。第一回は、三菱UFJ銀行の支店長にお越しいただき、「為替ってなあに？」というテーマで、小学部5～中学生が授業に参加した。また、ベネズエラでのハイパーインフレの状況なども解説いただくなど、日本にいてだけではわからない、世界の情勢について知る機会を持つことができた。

(4) フォルクローレ

南米の民族音楽であるフォルクローレを体験する授業。サンポーニャやケーナを練習する。1学期の間、講師の先生をお呼びし、2学期の学芸会で発表する。現地人の講師とのやりとりも派遣教員の仕事である。

4 成果（派遣教員として得たもの）

「早いうちに派遣で行くと苦労するよ。」と言われていたが、その意味を思い知ることとなった。少ない派遣教員で全ての行事や校務分掌を遂行するためには、1人1人の能力が高くなければ回らない。1人で0から100までを企画運営する能力を求められる。また、別々の都道府県からきた教員が、それぞれの土地で培ってきたやり方を提案し合うので、コミュニケーション能力も必要となる。各方面に意識を配りながら、全体がうまく進むように協力する姿勢が必要だ。私はこの派遣で、「学校を回す」「学校を作る」という視点をより感じられたように思う。英語科として「自分の英語力を生かしたい」と思っていたが、個人の授業だけではなく、学校としての外国語の方向性もたった1人の英語科の教員が担うことになる。そのような責任の重さを感じた3年間であった。

また、小学部の国語や音楽、外国語の授業を担当させていただき、長期的な視点での児童生徒の成長過程や学習カリキュラムを研究することができたことは大きな収穫であった。現在、特別支援学級の担任をしているが、生徒が小学校の段階のどこでつまずき、困難を抱えたままとなっているのか、より具体的に問題を解決する視点を得られたと感じている。また、ペルー人生徒のスペイン語対応も行っている。南米で得た視点を生かし、日本でも、日本人学校と変わらず、一人一人に寄り添った教育ができるよう尽力していきたい。

バンコク日本人学校に赴任して

明石市立清水小学校 加賀 悠士

1. タイの概要

タイ王国は東南アジアの中心に位置し、国土の面積は約51万4千平方キロメートルで、日本の約1.4倍である。ミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を隣接している。北部は中華系、南部はマレー系の民族が多く、山岳部には、モン族、カレン族といった少数民族が暮らしている。豪華な寺院や歴史を感じさせる遺跡、すぐ近くにサンゴ礁が見られるビーチリゾートなど、観光場所が数多く存在し、年間4000万人の観光客が訪れている。



バンコクはタイの首都であり、現在急速に発展している。高層ビルがいたるところで建設されたり、高速道路が延長されたりと、バンコクで生活している中で、発展していることを肌で感じる事ができた。その一方で、屋台が撤去されるなど、タイの文化を象徴するものが発展により少しずつ姿を消している状況も見られた。

2. バンコク日本人学校の概要

バンコク日本人学校は、大正15年(1926年)創立の世界一歴史のある日本人学校である。人口増加に伴い、2009年にシラチャ日本人学校が開校されるが、現在でも小・中を合わせた児童・生徒数は2500人を超え、教職員も200人と世界一大きな日本人学校となっている。9割の児童がバスで登下校し、バスの台数は大型バス、バン合わせて175台にもものぼる。第一小学部棟、第二小学部棟、中学部棟と3つの校舎があり、グラウンドが二つあるが、児童・生徒数に比べて、教室数が少ないこと、グラウンドが狭いことが本校の大きな課題である。

3. 特色ある教育実践

(1) 現地校との交流学習会

バンコク日本人学校では、毎年、現地の私立学校と交流学習会を行っている。文化交流では、タイの児童に習字や昔遊びをタイ語で教え、タイ衣装の着方やしおり作りを教わる。スポーツ交流では、タイフーンやボール渡しなどのゲームを日本人とタイ人混合チームで行うことで交流を深める。また、お互いの国のダンスと一緒に踊るダンス交流も行っている。派遣3年目の交流学習会ではBKK48の「フォーチュンクッキー」がタイで流行っていたため、タイ語で歌い、一緒に踊った。同世代のタイの友達と触れ合えることは、今まで学んできたタイの文化、習慣、言語を実際に活用することができる貴重な経験となっている。なぜならバンコク日本人学校の児童が住んでいる地区は日本人が多く、普段の生活でタイ語をあまり必要としない環境にある。そのため、事前アンケートの「タイ語を話せるようになりたいですか。」という項目に対し、そう思わない、あまりそう思わないと答えた児童が20%近くいた。しかし、交流学習会後の事後アンケートでは、タイ語を話したいという児童がとて増えた。実際に交流を行うことで自分の考えが言葉を通して伝わった喜びやうまく伝えることができなかつた悔しさを学ぶことができたからだと考える。国際理解教育の底流には人権意識がある。他者理解を進めることで自己理解が深まり、自己理解が深まることで他者理解が促進するといった相互作用が働いて深まる教育活動である。交流学習会での体験を楽しい思い出として、一人一人の心の中に残すことも意義があるが、これらの教育活動を通して、相手の良さを認め、尊重することの大切さを学び取ることが重要である。



(2) 宿泊行事

①チャーム臨海学校（5年生）

この臨海学校の最大の行事は、500mの遠泳を行うことである。そのため、新学期が始まってすぐ週2回水泳の授業を行っている。1年間通して水泳ができる常夏の気候を生かしたプログラムである。また、キャンプファイヤーや砂の芸術祭なども行っている。臨海学校を通して目標をもち、あきらめずに取り組むこと、友達との仲を深めること、自分の役割に責任を果たすことが主な目的である。

②チェンマイ修学旅行（6年生）

タイ・北部に位置する都市でバンコクと約700Km離れている。そのため、飛行機での移動となる。フライトの待ち時間が長いため、空港のゲートラウンジで読書を行うが、300人の児童たちが静かに読書する姿はタイのネットで見集めた。6年生はこの修学旅行でチェンマイの現地校と交流学习を行っている。また、象乗り体験やセラドン焼きの絵付け体験、ワットドイステーブの見学なども行う。

(3) 音楽朝会

バンコク日本人学校小学部は児童数が多いため、音楽会というものがない。そこで月に1度、小学部全校生徒が中庭に集まり、担当の学年が合唱を披露し、今月の歌を全校生で歌う。2000人を超える歌声は圧巻である。2019年度は中学部と連携し、小中合同の音楽朝会が開催された。中学生の迫力のある合唱を聞けることは小学部の児童にとって、とても良い経験となった。

(4) 運動会

毎年11月中旬に運動会が行われるが、全ての学年で団体演技が行われることから2学期に入るとすぐに運動会の練習が始まる。どの学年も300人を超えるため、最初はクラス単位で練習を行う。全体で合わせたときに動きが合うように、動きのポイントや到達度を教師間で打ち合わせを行うことが非常に重要である。3年生は「エイサー」、4年生は「よさこい」、5年生は「チアダンス」、6年生は「フラッグダンス」と棲み分けがされており、どの学年も発達段階に応じて工夫が施されている。300人で行う団体演技は壮大である。当日はグラウンドに児童、保護者合わせて7000人が集まる。

私が派遣中、1年目は前国王様の崩御で中止、3年目は雨のため午前中のみで開催となった。タイという国で教育を行っていることを改めて実感させられる出来事となった。



4. 成果

タイという国でグローバル人材の育成という視点で教育を行うことができた。「自分の考えをもち、相手と対話したり、議論したりすること。」「自分との違いを認め、受け入れること。」は、日本で教えているときにはあまり意識していなかったが、現在ではこの二つの力をしっかり子どもたちに付けてあげたいと考えている。また、全国各地から集まった仲間と一緒に働くことで、学級掲示や自治的活動など、自分があまり知らなかった分野をたくさん学ぶことができた。

タイで生活する中で、見習わないといけないと思うようなことがたくさんあった。タイは日本と比べると不便なことが多いが、その分優しさを感じる場面が多かった。タイの人たちは特に子どもたちに優しく、道路を渡るときに助けてくれたり、電車で席を譲ってくれたりする。日本人は親切だとよく言われるが、親切心はあっても、実際に行動に移せる人は少ないのではないだろうか。タイの良さを子どもたちに伝えるのはもちろんだが、言葉だけでなく、自分自身実践していけるようにしていきたいと思う。このような貴重な経験をする機会を与えていただいた全ての人に感謝し、今後の教育に生かしていきたい。

1 メキシコの概観



(1) 正式名称はメキシコ合衆国（: **Estados Unidos Mexicanos**）。緑は独立、白は宗教的な純粋さ、赤は統一を表す。ヘビをくわえたワシがサボテンの上にとまっている中央の国章は、アステカ王国の建国神話に由来する。

(2) 面積 約 196 万km² (2010 年)。人口 約 1 億 1,498 万人 (2012 年推計値)。首都 メキシコシティ。言語 スペイン語。宗教 キリスト教 (カトリック) が約 9 割。主要産業 工業 (自動車・同部品、電気・電子機器など)・鉱業 (原油など)。インドやサウジアラビアなどとほぼ同じ緯度にあるメキシコは、国土の多くが標高 1,000m 以上に位置する、山あり、海ありの国である。高い山脈が国土の中央を貫いており、メキシコシティは富士山の 5 合目と同じ、標高 2,240m の高地にある。南部は熱帯雨林が広がり、中央部は高原、北部は乾燥地帯 (砂漠もある。) と、気候に富んだ国である。沿岸部には、カンクンやアカプルコなど世界的にも知られたリゾート地が多く存在している。また、かつてマヤ文明、アステカ文明などの古代文明が栄えた場所でもあり、多くの世界遺産がある。

2 日本メキシコ学院の概要

(1) 児童生徒数

①日本コース

児童生徒数 1 5 8 名、派遣教員 1 4 名 (校長・教頭・教諭 1 2 名)、現地採用日本人教員 2 名、メキシコ人教員 1 名、日本人事務職員 2 名、メキシコ人事務職員 3 名、メキシコ人スペイン語教員 3 名、メキシコ人スクールカウンセラー 1 名)、清掃職員 2 名、全教職員数は 2 8 名である。

②メキシココース

幼稚園部 210 名 小学部 397 名 中学部 310 名 高等部 157 名 総計 1,074 名

③メキシココース教員

幼稚園部 30 名 小学部 34 名 中学部 28 名 高等部 29 名 国際教育部 27 名

④共通経費事務職員 23 名 メキシココース事務職員 26 名

この共通経費職員というのは、学院の両コースに関わる仕事をしている職員である。例えば学院長・事務局長・購買課長・人事課長・庶務課長・国際教育部長等である。また共通経費とは両コースが使用するすべての施設設備や物品・人事・に関する経費であり、その経費負担割合は、日本コース 1 5 %、メキシココース 8 5 %となっている。

⑤外部委託事業 警備会社、清掃会社

(2) 施設設備

①校舎 日本コース小・中学部棟 メキシココース小学部棟 メキシココース中学部棟

メキシココース幼稚園部 (日本クラス・メキシコクラス) メキシココース高等部

②主な施設 体育館 温水プール 全天候型運動場 (ラバーコーティング) 芝運動場

多目的広場 (プラサ・デ・オノール) カフェテリア 駐車場 3 か所 水飲み場

③スクールバス ガルシアバス会社を 4 0 年にわたり利用。現在 1 1 台のバスが運行している。



3 特色ある教育実践

日本メキシコ学院日本コースは、1977 年、当時の田中角栄首相とエチェベリア大統領の合意のもと、日墨の架け橋となるグローバル人材を育成することを建学の理念として、3 億円もの巨額国費を投じて、設立された。28,000 平方メートルもの広大な敷地に、日本コースとメキシココースが共存し、交流教育をベースにして多彩な教育活動が展開されている。

(1) 2 文化 3 言語での教育

① 2 文化とは日本文化とメキシコ文化である。課外クラブ活動として、メキシココースの児童は和服の着付け、華道、折り紙教室を学習し、日本コースの児童はメキシコダンスを学習している。

- ② 3言語とは、日本語・スペイン語・英語である。メキシココースの児童生徒は、週6時間（4時間は日本語、2時間は日本文化）をカリキュラムに位置付けている。また英語も学習している。日本コースは、小学部1年生から英語とスペイン語を週1時間程度実施している。

(2) 常時交流教育

① 文化交流

日本メキシコ学院に一步足を踏み入ると、両コースの全児童生徒・教職員が、スペイン語と日本語で挨拶を交わす光景を目にする。学校行事においても、大運動会・文化祭はもとより、季節ごとの行事（七夕・節分・死者の日・クリスマス等）においても、両コースは互いに交流しあっている。

② 授業交流

総合的な時間に位置付けられて実施されている交流としては、折り紙交流、メキシコダンス学習、バスケットやサッカーを通しての学習が挙げられる。英語における交流は、日本コースの児童生徒がメキシココースの先生に教えてもらったり、メキシココースの児童生徒が日本コースに来て、日本流の英語教育を受けたりするような交流学習も実施している。また、音楽教育においても同様の取組を試行している。

4 シニア派遣について

- (1) 海外に出たがらない若者の増加からか、近年シニア派遣が増大している。私がいた中南米地区でも、15校中約60%がシニア派遣校長であった。教諭においても経験豊富なシニア教員の要請は高まっている。

私はシニア教員（教諭）としての必要な資質として次の点を挙げたい。

①健康 ②チャレンジ精神（過去の経験知にとらわれない事）

③協働性 ④ワード・エクセル・PPは最低限使えるように。⑤管理職と共に、後継の教師を育てる。⑥学校を守る。

- (2) 管理職としてのシニア派遣

日本の学校現場でも、管理職のなり手が少なく、各教育委員会を悩ませている。私も日本での校長の時は厳しい学校運営に迫られ、海外へ出してもらえなかった。

在外教育施設では、管理職として赴任する場合、過去に日本人学校経験者でなければ、現職時代に管理職であっても、教諭として赴任するというルールがある。この事は取りも直さず、いかに在外教育施設では、管理職として学校経営することが難しいかという事の裏返しである。私が思う管理職としてのシニアの資質は次のとおりである。

①健康 ②危機管理能力（マニュアルなき事例の対応が非常に多い）

③想像力・決断力 ④人間関係形成力（特に現地の方に対して）

⑤先を見通して、今、必要な手を的確に打てる能力

⑥YES・NO、「できる」「できない」をはっきり言い切る力

- (3) 管理職として若手教員に望むこと

私は常々、この在外教育施設派遣教員として海外で教育できるという事は、教育公務員特例法22条で保障された最高の研修出張であると主張してきた。それほど海外生活で学ぶことは意義のあることなのである。

若手教員に私が望むことは次の点である。

①健康 ②情熱（在外教育施設で学ぶ全ての児童生徒に日本以上の教育を授ける!!）

③管理職との報告・連絡・相談を忘れない。（何事にも、早い目早い目に、校長に伝えて合意形成を図っておくことが非常に大事である。）

④保護者をなめるな。（日本の保護者と違い、非常に社会的見識が深い高学歴な方が多い。謙虚に学べば多くの事を学べる）

⑤配偶者を大切に。（海外において最も大切にしなければいけない人は配偶者である。感謝の思いを忘れず、日常会話を豊かに。）

⑥赴任国の人に、日本文化を伝えられる人に。（私は33年前のインド・ムンバイ日本人学校赴任から帰国後、都山流尺八を学び28年目）

シアトル日本語補習校に赴任して

シアトル日本語補習学校（丹波篠山市立城南小学校） 中野 龍文

1 アメリカワシントン州シアトル市の概要

ワシントン州の州都はオリンピアです。面積は約17万km²で日本の半分弱です。位置的には、アメリカ西河岸の北部に位置し、太平洋を隔てた日本と最短距離にあります。州名は、初代大統領のジョージ・ワシントンにちなんでいます。年間を通じて常時、緑（常緑樹）が多く、「エバーグリーンステート」とも呼ばれています。

シアトルは、今までにイチロー選手・城島選手・佐々木選手・青木選手・岩隈投手など有名選手が所属し、現在は菊池雄星投手などが活躍している有名なシアトルマリナーズの本拠地です。また、スターバックス発祥の地としての知名度は高く、マイクロソフト社、ボーイング社、任天堂、アマゾン、コストコなど名だたる企業の本社があり、MRJの開発の拠点となっています。さらに、自然も多く、素晴らしいところです。水と緑に恵まれ、「エメラルド・シティー」ともよばれる所以です。

2 補習校とは、（正式には補習授業校といいます。）

一般的には、各地の在留邦人等によって設立され、そこに組織される学校運営委員会によって運営されています。在留邦人がその子どもの国語等の学力維持のために設立している施設で、国語、算数（数学）、理科及び社会等の教科を学ぶ、教育水準の維持を図るための補完的教育施設となっているものもあります。

補習授業校（以下補習校）は基本的に「英語圏」に多く設立されています。英語の世界的な汎用性に鑑み、せっかく英語圏にいるのだから滞在中に英語を習得させたい。だから、平日は現地の公立学校等（現地校）に通い、且つ帰国時に日本の学校にスムーズに順応するために土曜日（金曜日の夜間や日曜日のところもある）は補習校へという流れになっているのです。米国で日本人学校が殆どないのはこのためです。シアトルも同じです。日本政府は、その規模（在籍生徒数）によって日本から教員を派遣しています。（校長・教頭職）。

3 シアトル日本語補習学校の概要

シアトル日本語補習学校は、昭和45（1970）年に設立された私立の学校（日本政府から正式に認められた学校ではありませんでした）です。ちょうどスターバックス1号店がシアトルに誕生した年と同じ年です。運営母体はシアトル日本商工会（春秋会）で、その教育部会理事が中心となって学校運営委員会を組織しています。運営委員は1月～12月の任期で、8月を除く毎月最終木曜日に定例会を開きます。運営にかかる費用は、主に①入学金および授業料、②商工会からの補助金、③日本政府からの補助金（講師謝金、校舎借料等）でまかなわれています。

授業を行なう教員は全て現地採用です。教員は日本の教員免許、専門教科に関係なく教壇に立つこととなります。したがって、その教員の授業力や教員としての資質向上のための研修が、派遣教員の重要な任務の一つとなります。平成30（2018）年9月現在、幼稚園から高校まで約600名が在籍しています。子どもたちが通うのは基本的に土曜日だけです。自前の校舎はなく、本校は普段は高校として使われている校舎を借用しています。

図書室、倉庫兼コピー室だけは年間を通して借用しています。図書室には約18000冊の蔵書があり、随時新刊が入ってきますので、幼児から大人まで利用頂き重宝されています。

4 アンカレッジ日本語補習校巡回指導

アンカレッジ日本語補習校は、小学部21名・中学部6名で文科省からの派遣教員がいない小規模校です。文科省からの派遣教師がいないためシアトル日本語補習学校から年に1度、先生方や理事会運営委員の方を支援・指導しに行きます。

平成29年度の巡回指導では、派遣教員がいなくても、日々、子どもたちの日本語教育に邁進されている理事会の方々や経験がない中で一生懸命に授業をされている先生方、そして、保護者の熱心な協力体制が強く印象に残りました。また、アンカレッジ日本語補習校に学ぶ子どもたちの前向きな姿勢や頑張りを肌で感じることができました。



5 補習校の特色ある行事の紹介

(1) 渡嘉敷来夢選手の学校訪問

シアトルストームに所属しアメリカのプロバスケットボールチームで活躍中の渡嘉敷来夢選手が学校に来てくれました。渡嘉敷選手は、リオオリンピックの日本代表選手でアメリカ戦では大活躍しました。補習校の生徒には、「夢の実現」に向けて、ご自分の経験を元に講演してくださいました。



(2) PTA主催の古本市開催

PTAの古本市委員会の方が中心になり、シアトル在住の日本人の方から沢山の日本語の本を寄付によって集めて販売されます。多くの方が古本市を楽しみに本を買いに来られます。総額の売り上げは、なんと約75万でした。

(3) お母さんたちの人形劇講演

お母さんたちを中心として、人形劇のボランティア活動を行っている耳文庫さんが、小学部の低学年に人形劇をしてくださいました。この日は、学級懇談会があり、先生方が全員出席されるので、その間の時間帯に公演していただきました。私は人形劇より、場面が変わるごとに、子どもたちの表情が変化していくのが楽しかったです。



(4) 宝塚歌劇団の公演

宝塚歌劇団のOG公演会が開催されました。シアトルの大学の演劇科が招待したのですが、貴重な時間を割いて、学校訪問していただき、本校の子どもたちにも公演して下さいました。映画やテレビ等でデジタル化が進む中、舞台のダンスや発せられる歌声がまさしくアナログで、人の持つ力やエネルギーを感じ素晴らしい公演に感動しました。舞台のダンスや歌声も素晴らしかったです。

子どもたちの観る姿勢も素晴らしく本物に出会った感動に驚きや発見があったことと思います。(出演者) 毬穂えりな 綺華れい 紫峰七海 珠まゆら の4名の宝塚歌劇団OGの皆さんでした。



6 成果 (シアトル日本語補習学校の改革と子どもたちから学んだこと)

学校運営の取り組みでは、教職員や保護者の意見等に誠実に対応し、課題解決に向けて積極的に手立てを講じました。常に教育目標に基づいた計画立案・プログラムの実施に心がけ、カリキュラムの見直しや改善を行い、教員育成プログラムを構築し、新規教員の育成に努めました。さらに定期的な研修・直接対話を持って現地採用教員のレベルアップと教育目標への意識向上に尽力しました。また、「安心・安全な学校運営」の下、セキュリティ体制や図書室の整備等、防犯・教育環境の充実にも努めました。これらの取り組みにより補習校へ貢献しました。

アメリカで暮らす子どもたちは、バイリンガルになるため現地校と補習校を両立し、自らがスケジュールの管理を行い、夢や希望を持って、日々、英語と日本語で授業を受ける努力をしている。この姿に日本の学校では、感じられないエネルギッシュな活動力・表現力・向上力を強く感じました。このエネルギッシュな力を日本の子どもたちにも伝え、世界中で活躍する国際人の育成に役立てていく所存です。

マドリッド日本人学校に赴任して

マドリッド日本人学校（丹波市立青垣小学校） 村山 次郎

1. 赴任地（スペイン及びマドリッド）の概観

スペインは、ヨーロッパの南西部に位置し、四方を地中海と大西洋に囲まれたイベリア半島の大部分を領有する君主議会制の国家である。半島中央に位置する首都マドリッドは、人口約 644 万人を抱える大都市（マドリッドは1州1県）である。スペインの経済、文化の中心を担っている首都マドリッドが大きく発展したのは、1561年に時の王フェリペ2世がトレドからこの地に首都を移して以来のことである。王宮をはじめ多くの博物館や美術館、教会、劇場、公園などの歴史的建造物、数多く残されたスペイン王家に由来する文化遺産が魅力の都市である。マドリッドは古くからカスティーリャ王国の首都であったことから、マドリッド人の気質はしばしば「質実剛健」「見栄っ張り」「古典的」といった言葉で表されるようだ。ところで、赴任後すぐに何人かの方々から「マドリッドは関西人と合う」と伺った。半年も暮らせばすぐに実感することになった。明るく、お喋り大好き、その声は大きく、靴の中からチュッパチャップスが次々と出てくる。鼻根のサッカーチームへの愛情は、まるで私が幼い頃の阪神ファンのそれであった。また、一般的に多くのスペイン人は親日で、日本の文化への興味・関心は高い。日本のアニメや漫画、ゲーム、日本食レストラン等を目にする機会が多い。



2. マドリッド日本人学校の概要

マドリッド市内から約 14 km北西にある閑静な住宅街に位置する。1981年にマドリッド進出の日系企業の会の寄付金をもとに設立された。開校当初の児童・生徒数は 50 名程度、その後、バルセロナオリンピック開催による日本企業の進出で 150 名を超えたこともあったが、ここ数年は小・中両学部合わせて 20 名前後である。日系企業の規模縮小に加え、インターナショナル校を選択する家庭の増加が背景として挙げられる。また、日本人学校に在籍する児童生徒（短期入学生含む）の半数以上が父母のどちらかが日本人ではない、所謂ダブルの子どもたちであった。児童・生徒の確保が学校経営上の大きな課題であったため、短期入学制度（1月以上の在籍）や夏季体験入学（現地校の夏季休業に合わせ、現地校やインターナショナル校に通う児童を 2～3 週間受け入れる）等の工夫を行っている。

3. 特色ある教育実践

（1）複式学級の教科指導

マドリッド日本人学校は小規模校であるため、小学部は全学年、中学部は年度によって複式学級を採用している。小学部の国語科は、全て複式による指導であった。1年目は、手探りでの授業づくりだったが、複式での国語科授業の流れを身に付けることができた。2年目、1・2年生を担当したが、1年生児童は全てダブルの児童であった。日本語力低位の児童に、複式授業を通して学力を保障するのは、大変に骨の折れる作業であった。研究担当者や複式指導経験のある教員に力を借りながら、以下のように取り組んだ。



①児童だけで学習を進める工夫

複式指導では間接指導の時間に、児童自らが学ぶ仕組みを作ることが大切であることを校内研修で学んだ。そこで、1年生児童がひらがなやカタカナの学習を自分たちで進めやすいよう、リーダー学習を取り入れた。最初に、新出文字を学ぶ流れを教師が直接指導した。次に、指導時の板書の写真を印刷し、リーダーの児童が進めやすいように児童の手元に置かせた。さらに、児童が文字のバランスが正しいかどうかを自分たちで判断できるよう、学習する文字をラミネートフィルムにマジックで書いたものを持たせた。1学期の半ばには、最初に本時で習う文字を教師が指示すると、児童自ら文字の学習を進めることができるようになった。

②保護者との連携

日本でも、児童の指導には保護者との連携が欠かせない。どうしても日本語に触れる機会が少ないダブルの児童の指導には、さらなる連携が必要だと感じた。子どもたちは、現地校にも通った経験があり、日本の教育とのギャップを感じているように見受けられた。そこで、年度当初には保護者との懇談を行い、日本人学校の教育方針への理解を求めた。また、週に1回発行していた学級通信で、児童の伸びに加え、音読や「書くこと」を日本語指導の中心に位置づけた教師の考えを積極的に伝えた。

(2) 現地理解教育

①現地理解教育の概要

マドリッド日本人学校では、在外教育施設の特性を生かし、以下のような現地理解教育を行っている。

- ・ 宿泊体験学習…6月実施。現地の施設に宿泊する2泊3日の自然体験学習。
- ・ 社会見学…11月実施。王立劇場、ワイン工場、クリーンセンター見学等。
- ・ 福祉施設訪問（小学部のみ）…12月実施。学校近隣の福祉施設で高齢者の方と交流する活動。
- ・ 現地校との交流…2月実施。現地校の児童を受け入れ、日本の文化を教えたり、遊んだりする。

これらに加え、日常的な教育活動として、ネイティブの講師によるスペイン語や英会話の授業もある。

②教材開発

大きな行事として上記の活動が位置づけられているが、海外という事情からバスや自家用車による送迎が基本であり、日常的に現地を体感し、理解する機会は限られている。そこで、まず、生活科の時間に校外へ出かける活動を増やした。学校の近隣の公園に出かけ、植物や昆虫を採集したり、探検したりした。次に、学校周辺や自宅と学校との間に、校外での活動が可能な場所を探した。下見や会議での提案等を経て、赴任2年目には、現地理解教育の一環として1・2年生生活科の川探検を実施することができた。



4. 成果（派遣教員として得たもの）

(1) 価値の見直し（考えを改め、捉え直す）

日本人学校は、全国各地から来た、異なる校種の教員が共に教育活動に当たる。当然、行事や授業に対する考え方や教育の方法も異なる。また、派遣教員、児童・生徒が入れ替わるため、継続性が難しい側面を持つ。その中で、日本で培った自分の考えや方法を見直し、児童・生徒に本当に必要な事かどうかを検討し、作り直す作業の繰り返しだったように感じる。特に、現地理解教育については言語面で、現地採用の職員の協力が欠かせない。必要なことは、現地採用職員や派遣教員に忍耐強く訴え、協力しながら教育活動を行う大切さを感じた。また、児童・生徒からの要求も、価値の見直しを迫るものがあった。現地校に通った経験が長い児童の中には、日本人学校の活動に対して、意義を見出せない児童も居る。日本では、当然と思っていた日々の活動や行事についても、「意味あることなのか」、「どんなねらいか」等を私自身が見つけ直す機会となった。海外の事情や文化を踏まえた上で、日本の教育の良さを打ち出すには、本質を捉えておくことが大切だと感じた。

(2) 馴染む（現地を知り、考えを広げる）

日本人学校では、経験したことがない教科や仕組みを経験することが多い。現地の文化や日本人学校の伝統を尊重し、異文化や初めての事にも馴染む努力を続けることが大切だと感じた。各地から派遣された教員と考えを交流すること。在住日本人のコミュニティに参加し、日本人学校に対する願いを知ること。スペイン人と良い関係を築き、現地の文化に親しむこと。これらが目の前に居る児童・生徒への教育活動に繋がる。直接的には厳しい条件下での教材・教具の調達や現地理解教育の教材開発、間接的には児童・生徒や保護者、現地採用職員との信頼関係に繋がっていたように思う。



派遣教員としての3年間は、苦勞することの方が多かった。しかし、日本では得られない貴重な経験をし、自身の考えや物の見方の幅が大きく広がった。この財産をまた、現在の場所で還元していきたいと思う。

1. 任国の概観

(1) パラグアイについて

パラグアイは、南米大陸の真ん中に位置する、面積 40 万km²（日本の約 1.1 倍）、人口 700 万人ほどの内陸国である。公用語はスペイン語とグアラニー語である。国旗は、表と裏でデザインが異なる。農業が盛んであり、大豆、小麦、牛肉等を輸出している。特に大豆は輸出量世界第 3 位である。また、ブラジルとの国境沿いにイタイプダム、アルゼンチンとの国境沿いにジャスレタダムを有し、電力を近隣国に輸出している。南米の中では、比較的治安がよく、政治が安定していることから、近年は投資が増え、経済成長が著しい。

日本との関わりも深く、2019 年に日本との外交関係樹立 100 周年を迎えた。また、1959 年に移住協定が結ばれ、現在約 1 万人の日系人が暮らしている。ラ・コルメナ、ラパス、ピラポ、イグアスなどの日系移住地だけでなく、首都のアスンシオン、エンカルナシオンなど都市部にも居住している。移住地では農業に従事している日系人が大半であるが、都市部ではサービス業に従事している人が多い。日系人が農業を牽引してきた部分もあり、親日家が多い。

(2) 首都アスンシオンについて

アスンシオンの面積は 117 km²、近隣の都市を合わせた都市圏は 1000 km²である。人口は、アスンシオン市で 50 万人、アスンシオン都市圏では 200 万人を超えている。旧市街と新市街があり、近年は新市街の開発が進み、新市街に多くのショッピングセンターなどができ、経済の中心地となりつつある。

2. 配属先について

私は、首都アスンシオンにあるパラグアイ三育学院に配属された。パラグアイ三育学院は、今から約 50 年前に、日本人の野崎牧師と柴田牧師によって、開校された。開校のきっかけは、日系人から子弟の教育を憂慮する声が多かったことであり、アスンシオンで初めての寮付きの日本語学校として始まった。当初は、日本と同じ教育を目指していたが、現在では日本語に特化している。午前と午後の 2 部制で、2 歳児から高校生までが通っている。午前、午後の部ともに、月曜日から金曜日まで 40 分授業が 2 コマあり、現在の児童・生徒数は約 30 人である。両親ともに日本人で、家庭言語も日本語の児童もいれば、全く日本にルーツをもたない現地の児童、生徒もいる。日本語のレベルもさまざまであり、ゼロ初級から日本語能力検定試験 1 級レベルまで対応する必要がある。そのため、一斉授業ではなく、個別指導の形態を取っている。教材も、日本語教育のものから、光村の国語の教科書まで様々である。

また、開校から数年後にスペイン語部が作られた。スペイン語部は、パラグアイ政府公認の私立学校である。そのため、パラグアイの教育カリキュラムに沿った授業を行っている。午前と午後の 2 部制で、2 歳から高校生まで合わせて 400 名程度が通っている。また、夜間には大学があり、看護学部や心理学部などがある。日本語部に通う多くの児童、生徒が隣接のスペイン語部に通っている。

日本語部とスペイン語部は、児童・生徒の募集や会計などは、それぞれの学校で行なっているが、教員同士の交流はある。



3. ボランティア活動

(1) 配属先での活動について

配属先では、主に 2 つの活動を行った。1 つ目は授業である。主に非日系の日本語教育を担当した。12 月の日本語能力試験前には、試験対策の特別講座なども行った。今まで日本語能力試験を受けようとしなかった学習者が受験したり、ゼロ初級の学習者が 1 年未満の学習期間で、日本語能力試験 5 級に合格したりするなど、目に見える形での成果もあった。



2 つ目は教材開発である。赴任当初は統一されたカリキュラムもなく、教材の数も十分ではなかった。そのため、今後は日系人の家庭言語もスペイン語が優勢になるだろうことを見据えて、日本語教育を中心に、小学生向けの補助教材と中高生向けの主教材を作成した。語彙や場面設定には特にこだわり、パラグアイの文化なども取り入れた。

そのほかには、12 月に行われるバンケットと呼ばれる学習発表会の指導も行った。1 年目には劇を、2 年目には朗読劇と暗唱を行った。当日、児童が欠席するなどのトラブルもあったが、保護者や学校関係者に学習の成果を発表する良き機会となった。

(2) 他のボランティアとの活動について

JICA ボランティアには教育系のボランティアだけでなく、地域開発や医療関係のボランティアなど、様々な業種がある。そのため、他の業種の隊員の活動先を見に行ったり、共に活動したりすることもあった。その中の 1 つとして、配属先にある楽器の修理が挙げられる。パラグアイには楽器の修理を行う専門家がほとんど存在しないため、配属先からも大変喜ばれ、音楽の教員も、自ら修理を行うようになるなど、継続的な支援となった。

また、教育部会を立ち上げ、現地の学校で研究授業を行ったり、情報交換会を行ったりした。教育部会にも、教育系以外の隊員の参加もあり、様々な経歴の方々とともに活動できることは JICA ボランティアの醍醐味であると感じた。

(3) その他

アスンシオン日本人会所属の和太鼓チームに参加し、週 1 回練習に参加するとともに、月に 1 回程度演奏会に出演した。日本人会主催の敬老会や日本祭りなどにも出演でき、日系社会について知るきっかけとなった。また、ブラジル移民 110 周年記念イベントや、安倍首相来パ歓迎イベントへの出席などの機会にも恵まれた。

4. この経験で私が学んだこと

「教育は世界を変える。」今回の派遣で、痛感したことである。場所が違っても、文化が異なっても、教育者としての使命には変わりがない。また、世界中に熱い思いを持って教育に携わっている仲間がいることは、大変心強い。

これからは、パラグアイと日本の関係がさらに深まるよう、パラグアイのことを日本の学校で発信するとともに、パラグアイの仲間に日本のことを発信し続けていきたい。



ハノイ日本人学校に赴任して

川西市立緑台中学校
飯塚恵子

1 赴任地の概観

ベトナム社会主義共和国は、インドシナ半島東部に位置し、国土は南北に 1200km と長く、北に中国、西にラオス、カンボジアと接し、東は南シナ海に面している。南北に長いため、四季のある北部と熱帯気候下の南部と気候も異なっている。面積は約 33 万平方キロメートルで、日本の総面積から九州を除いた広さである。山岳が国土の多くを占めており、平野部は北部のホン川（紅河）デルタおよびメコンデルタで、それ以外は海岸沿いにわずかに広がっている。人口は 9370 万人で、経済の中心になっている南部のホーチミン市（旧サイゴン）と、政治・文化の中心となっている北部の首都ハノイ市の 2 都市に人口が集中している。平均年齢は 28 歳で、日本の 44 歳と比較しても非常に若い。



第二次世界大戦前はフランスと日本に侵略されていたが、第二次世界大戦後も領土支配をめぐってフランスやアメリカとの戦争に突入、南北のベトナムに分裂してしまい、1975 年までベトナム戦争を続けることになる。ベトナム戦争が終結し南北統一を果たしたが、その後カンボジアや中国との戦争が続き、完全に終戦を迎えたのは 1981 年。他国に比べて大きく経済成長遅れたが、1968 年に掲げられたドイモイ政策により、市場経済システムの導入と外資系企業のベトナム進出を受け入れ、資本主義経済を一部取り入れたことで、経済が成長し始めた。2018 年の GDP 成長率は 7.1%、ASEAN 域国でもトップクラスの成長率となっている。2018 年に日越外交関係樹立 45 周年を迎え、日本企業の進出数もここ数年増加傾向にあり、2,527 社にのぼる。製造業が中心であった以前に比べ、多種多様な業種の進出が増えている。それに伴い、在留日本人も年々増え、2018 年現在で 17,000 人となった。ベトナムの人々の中には、これまでの経済発展に協力的であった日本に対し好意的な感情を持っている人が多く、日本の文化を学ぶ学生数や日本語の習得率がアジアトップクラスだと言われているほど、親日的な国民性である。

2 赴任校の概要

ハノイ日本人学校は、1994 年に補習校としてスタートし、1996 年に 13 名の生徒で交通運輸大学の敷地で開校した。日本企業の対越進出増に伴い、2005 年には 125 名にまで増加し、2006 年、ハノイ中心部から約 5 km の西にある現在の敷地に 250 名を収容できる学校として移転した。2010 年までに児童・生徒数が 250 人に達したため、今後の児童・生徒数増加を見越して、2016 年には新校舎が増築された。校舎、体育館、プール、テニスコート、グラウンドなど、国内と変わらない設備・施設となっており、どの教室にもパソコンとプロジェクターが設置されていたり、1 クラス分の生徒数のタブレットが完備され



ていたり児童・生徒が学習しやすい環境が整っている。1 学級の人数を 25 人以下で構成しており、一人ひとりを丁寧に指導する教育体制をとっている。2018 年度 5 月現在の在籍児童・生徒数は 421 名（小学部 348 名、中学部 73 名）、学級数 21（小学部 17、中学部 4）、教員数 31 名、ベトナム人講師 1 名、英語講師 7 名。教育目標は「自信と誇りを持ち、持続可能な社会を創る児童生徒の育成」～好奇心こそすべての始まり～とし、校訓は「やさしく・かしこく・たくましく」を掲げ、教育活動に取り組んでいる。

3 特色ある教育実践

(1) 現地理解教育

① 現地校交流

小学校1年から中学校3年生まで、全学年が現地の私立校との交流会を年に2回行っている。互いの国の文化や遊び、歌、ダンスを紹介したり一緒に体験したりする活動を通して、異文化を肌で理解する取り組みを行っている。中学2年生では、UNIS（国連学校）の生徒と交流する機会もあり、日頃の英語学習の成果を発揮し、グローバルな考え方に触れる貴重な機会となっている。基本的に小学生はベトナム語、中学生は英語を使って交流を行う。

② 校外学習・体験学習

ハノイは比較的治安がよく、校外学習や体験学習が実施しやすい。小学生では、学習単元に応じて工場見学や町探検、農業体験などを行い、中学生はキャリア教育の一環として職業体験（ホテル）、幼稚園実習なども行っている。また、ゲストティーチャーを招いての授業も多く、海外で活躍する人の話を聞き、自分たちの進路開拓に役立てる機会を多く設けている。



③ ベトナムならではの教材や体験的な学習

ハノイ日本人学校の研究テーマは「国際感覚豊かな児童生徒の育成」である。各学年部で児童生徒の実態を把握し、そこから子ども達に身に付けさせたい“国際感覚”を検討し、ベトナムならではの教材を使って各教師が授業を実践している。発達段階や各教科に応じて、切り口の違う様々や教材・授業は非常に興味深く、それらは研究収録としてまとめられ活用されている。

(2) ベトナム語教育・英語教育

小学校1～4年生までは、週に1時間、ベトナム語の授業を設けている。あいさつから日常会話までを習得すると共にベトナムの文化や習慣を知るきっかけにもなっている。中には、日頃から積極的にベトナム人と関わり、一人で市場に買い物に行き値段交渉までできるようになる児童もいる。英会話の授業は小1～4は週2時間、小5～中3は週3時間設けている。1学年を習熟度別に5～6つのクラスに分け、英会話講師による少人数の授業を実施している。英語に興味がある児童・生徒が多く、本校で実施する英検への受検率も高い。また、生徒会の委員会として国際交流委員が設置されており、世界各国の言葉を紹介したり、シンチャオパーティー、テトカーニバルなどのベトナムの文化紹介をしたりする活動を行っている。

(3) 社会科副読本「シンチャオ・ハノイ」

ハノイ日本人学校では東京書籍の教科書を使用し、日本と同内容の授業を実施している。また、地域学習や産業学習、歴史学習など、ベトナムやハノイについて学ぶ資料として、社会科副読本「シンチャオハノイ」を併用している。これは、5年に1度、作成委員会を編成し、全教師で調査・作成を行い、改訂を行っている。社会科だけでなく、道徳や総合学習の時間で活用されている。

4 成果

3年間のハノイでの生活で得たことは、まず「やってみることの大切さ」である。1年目・2年目と小学部の担任を任された。初めてのことで不安ではなかった。同時にこれまでの教員生活は何となくの経験だけでやってこられたのだと痛感した。とにかく目の前の子供達と向き合い、毎晩、教材研究に励み、やれることだけはやった。それは自信になり、今の教育現場での自分を助ける「力」となっている。日本では経験できなかった、感じられなかったことだと思う。次に、国を超えて、県を超えて、世代を超えて「自分の視野を広げられた」ことである。ベトナム人との生活の中で考え方や習慣の違いから、自分の常識が変えられた。他府県の先生方と働く中では、同じ事をするのでもやり方や考え方がけだけあるのだと知った。小学生から中学生の子供達と関わる中で、発達段階に応じてこんなにも違いがあることも気付いた。そして、海外で生活する子供達と一緒に勉強する中で、たくさん事を学んだ。海外で起こっている問題を自分の事として捉え、どうやって解決しようかと必死で考えている子供達の姿には感動も覚えた。生活している国や場所・世代が違っても、その人の考えや思いを聞き、受け入れることで自分の視野が広がり、自分を高めていくことができるのだと実感した経験であった。

「 台北日本人学校に赴任して ～ やりがいと働きやすさとは何なのか ～ 」

神戸市立湊翔楠中学校 渡辺 裕史

1 赴任地の概観

- (1) 日本の 10 分の 1 の面積（九州ほどの大きさ）と人口約 2358 万人の地域である。台湾（中華民国）は沖縄県が一番近い与那国島からだと約 100 km しかない。また中華人民共和国（現地の人たちは大陸という）とも地理的に近く経済的な面だけでなく、文化的、政治的にも重要な場所である。西部への人口の集中が見られ、中央部は山岳地帯、東部は少数民族や風光明媚な観光地、温泉などはあるが人口は非常に少ない。



- (2) 台湾と言えば東北大震災の際に 200 億円以上の寄付を贈ったことで有名だが、台湾も地震の多い国でもある。また日本への観光客も多く、毎年 1000 万人以上が外国へ行く、実際留学をする現地の学生も多い。そんな中でも訪日台湾人観光客は、非常に大きな割合であり 2018 年では約 475 万人にも達する、台湾の人口約 2358 万人からすれば 5 人に 1 人が訪れた計算になる。

北海道に雪を見に行くなど美しい自然やおいしい料理などを求めているようだ。もちろん、それほど親日的なものには現在の漫画や文化などの前に歴史的なつながりがあったからである。

- (3) 日清戦争の後に結ばれた下関条約。これにより台湾および澎湖諸島は日本の領土として割譲された。その後の詳しい歴史は紙面上割愛するが、日本語の教育を受けた世代は現在高齢化しており、その子や孫が一部、家族との会話や仕事などを通じて日本語を獲得しているというのが実情である。一部の高校や大学には日本語学科などが設置させている所もある。

また日本統治時代には、八田與一など多大なる功績を遺した人物がおり現在でも信仰されている。言語的な話をすると現在の学校では北京語を教えているので、いわゆる台湾語を話せる若者の減少に危機感を抱く人も少なくない。しかしここ 10 年ほどで国民党以外の政党からの総統が就任するなど、大陸の中国への反抗などは表面的には少なくなった。しかし経済的な影響は大きく中国による政策には目を光らせている。

2 赴任校の概要

- (1) 私が赴任した台北日本人学校は、台湾に 3 校ある日本人学校（台北・台中・高雄）の中で最大規模である。制服は存在せず、小学部も中学部も私服である。小中一貫校であり、小学部は 3～4 クラス、中学部は 2～3 クラスの規模で全校生は 700 名前後である。（ちなみに小 1 は 30 人を越えるとクラスを増やす、その他は 35 人を越えるとクラスを増やすようになっていた。冷房はあるが暖房設備はない。）

創立 72 年目（2019 年度）に入るが、この場所に移転する前はもっと南にあり、小学部しかない時代もあった。すべての学年で現地の学校との交流会が行われている。

- (2) 教職員は約半分が文科省からの派遣されてくる教員が占め、残りの半数を台湾人で日本語を話せる人と日本人で台湾に住んでいる人が占めている。北は北海道から南は沖縄県まで様々な地域から教員が集まるので（当然台湾からや他の日本人学校から来た講師の方もおられた）、考え方の違いで戸惑うこともあるが、違うことを前提で話が進むので、非常に温かみや寛容さを感じた。長く務めている先生は台湾で結婚した人が多く、文化を尊重したり、変化にも柔軟な対応をしたりできる人が多いことが特徴である。このような先生が教員間を繋いでくれる。

3 特色のある教育実践

- (1) まずは小1から毎週行われる中国語の授業と英語活動の時間の存在である。中華圏の学校ならではのだが、単純に親しむだけでなく、小1からレベル別に分けての少人数授業を行っている。上級では現地の小学校の5年生レベルの教科書を使い（中学校2年生の場合）日本語を一切話さない状態での授業となる。また言語だけでなく端午節や清明節など中華圏の伝統的な行事や風習なども発達段階に合わせて紹介される。
- (2) ICTを使った学びも特色の1つです。2016年の1月頃からIpadを導入し、ロイロノートやkeynote、シンキングツールなど様々な学習教材を組み合わせた授業が行われ、プログラミング思考なども養われている。電子黒板はさらにその3年ほど前から導入されており、職員も当然のように使いこなしている。しかしIpadの導入では管理の方法や、制限のかけ方、使い方の指導など様々な問題点も浮上した。初期の頃は35台ほどであり、問題なく運用していたが、200台もの数になると教員での管理が困難になった。例をいくつかあげると、児童生徒や教師のアカウントの作成、Wi-Fiのパスワード設定、機能制限を設定するなどや貸し出しや授業後の返還や運搬、充電や修理などである。

学校の方向性としては最終的には2年後の一人一台入学時に購入してもらおう形を目指している。（中学生にはノートパソコンが望ましい。）そうすれば、重たい教科書を運ばなくても、デジタル教科書も入っているし、宿題も電子化できる。大量の学校からのお手紙も大半は電子化できるだろう。

4 成果

- (1) まずは自分自身のICT活用能力の向上である。最初はミラーリングや画面配信など戸惑うことも多かったが、使っていく中で、授業の幅の広がりや効率化にも役立てることができた。班の形にしなくても情報を共有できたり、意見の比較、収集ができたりする。素晴らしいノートや解答を写真にとり全員に送ることも容易いしそのデータはずっと保管されているので、前回の学びを振り返ることもできる。

- (2) そして最大の学びは、寛容性を学べたことである。現在認められている、16の少数民族や客家の人たち、そこにオランダからの支配、清による支配、日本による統治、国民党（外省人）による統治。これらの人と歴史が絡みあい、台湾には様々な考え方や風習が存在している。



私もその中で生活してみて、お互いを尊重し、優しく接する姿に感動した。電車では当たり前のように、高齢者に席を譲る光景が見られ、たくさんの人が車いすやベビーカーに手を貸す。困っている人を放っておかず、場所まで案内したり、日本語の分かる人を呼んできてくれたり、温かいだけでなく、安心感のある雰囲気。この重層性が社会の独自性にもつながっている。友人が「中国人ですか。」と聞かれると「いいえ、私は台湾人です」と自信を持って答えていた。もちろんこれは一例であり、自分は中国人と考えている方もいる。

私もこの寛容性を画一的な指導（白い靴下

とかスカートの丈、髪型の指導にあくせくする）に陥りがちな日本の教育にも取り入れていき、自己肯定を高めたり、不登校の問題にも関わっていかうと考えている。

調査 あなたは何人ですか	台湾人	中国人	台湾人かつ中国人
国立政治大学(1992年)	17.6%	25.5%	46.4%
国立政治大学(1996年)	24.1%	17.6%	49.3%
国立政治大学(2000年)	36.9%	12.5%	44.1%
国立政治大学(2008年)	48.4%	4%	43.1%
国立政治大学(2016年)	59.3%	3%	33.6%

香港日本人学校香港校中学部に赴任して

西宮市立上甲子園中学校 肥後 綾子

1. 赴任地の概観



(旧中学部から銅鑼湾を望む)

多くの人が活動している。

1997年7月1日、イギリスからの返還により、中華人民共和国の特別行政区となった。しかし、イギリスの影響を受けて英語を常用もしくは理解できる者が現在でも40%近くおり、世界の金融都市を支えている。一方で、現地の子どもたちが通うローカルの学校では、香港で話されている広東語の他に英語、普通語(北京語)の3か国語で学ぶよう奨励されている。その子どもたちだが、土曜日の午前中は募金活動などのボランティアを行う姿をよく見かける。

香港は、中華人民共和国の南部に位置する特別行政区である。『一国二制度』の下、世界的な金融都市であり、さまざまな人種が集まる場所でもある。東京23区の2倍の範囲に700万人を超える人々が暮らしており、世界でも有数の人口密度である。気候は亜熱帯地域に属し、5月頃から11月頃まで初夏から夏、初秋と暑い日が続く。一方冬は寒い日もあり、時には10℃を下回る時もある。

生活してみてわかることは、暮らしやすく、安全な都市であるということだ。香港は世界でも家賃が非常に高い都市であることは知られているが、多くの香港人は、いわゆるペンシル型のマンション(フラット)に住み、男性も女性も仕事を持つ人が多い。また、中秋節や旧正月には家族で過ごすことを大切にしており、お年寄りを大切にする社会でもある。店やスーパーも遅くまで開いており、夜遅い時間でも

2. 赴任校の概要

香港日本人学校香港校中学部は、1966年、銅鑼湾に小学部が設立され、翌年6年生が進級したことに伴い、開設された。2016年、創立50周年式典が挙行され、香港校、大埔校、中学部、国際学校4校の歴史とともに、未来への飛躍を誓い合った。

中学部自体は、香港島の北角(North Point)の山手に位置する寶馬山(Braemar Hill)に学舎があり、1982年から2018年3月まで中学部のみで教育活動を行ってきた。しかし、生徒数減による香港校小学部との統合が決定し、2018年4月から同じく香港島の藍塘道(Blue Pool Road)に移転した。2019年3月現在で、3学年合わせて200人近い生徒が在籍している。

校訓は、「時を守り 場を清め 礼を尽くす」であり、香港ならではの英会話や現地校との交流活動を多く取り入れた教育課程を編成し、夢と活力にあふれた学校づくりをめざしている。また、合唱発表会や体育大会など、日本の中学校でも行われる行事も大事にしており、修学旅行では中国の西安を訪れ、兵馬俑など世界遺産や中国の歴史的な建造物などに直接接触することで、学びを深めている。



(旧中学部校舎)

3. 特色ある教育実践

(1) 現地校生徒との交流

香港日本人学校中学部では、学年ごとに現地校との交流が図られている。在籍中1・2年生では現地中学生や日本語を学ぶ大学生と、3年生では香港大学に出かけ、英語で交流することが行われていた。1年生の交流は、合唱を披露したり、一緒にスポーツを楽しんだりし、英語、日本語、広東語を交えての交流会になる。普段はなかなか話すことができない同世代の現地の生徒たちとの交流は、思いを伝えることの大切さや、言葉の大切さを学ぶよい機会となっている。2年生では1年次に香港中文大学の日本語を学ぶ学生に、香港のことについてプレゼンをする際のアドバイスをもらい、2年生では班別活動で香港の文化的な史跡を案内してもらいながら現地を知る機会をもっている。大学生も2年連続で参加する学生がいて、アドバイスをくれた学生と再び出会い、さらに交流を深めることができている。中学部では1年次から英語の授業を週に6時間設定し、日本人教師とネイティブの教師とで英語の力をつけているが、3年生ではそれを生かし、香港大学の学生と英語での交流をしている。交流後は全員が報告のプレゼンをし、話す力、聞く力、まとめる力を向上させている。

(2) 現地校教師との交流

中学部では、生徒だけではなく教師も、現地校やインター校との交流をしている。赴任した1年目、2年目は、同じ寶馬山(Braemar Hill)にある聖貞徳中學(St Joan of Arc Secondary School)との交流があった。聖貞徳中學ではSTEAM教育を進めており、その授業を参観することができた。パソコンでデザインし、3D画像で立体化させ、実際のものづくりに生かしている。生徒が作ったリコーダーやドローンが展示され、その精密さに驚かされた。後日聖貞徳中學の先生方に来ていただき、今度は中学部の授業を見ていただき、交流会をもった。日本の教科書に大いに興味を持たれ、合唱発表会などは香港にはない行事ということで、これもまた大いに興味を持たれた。3年目は移転したことから、香港校に近いフレンチインターナショナルスクールと交流を持った。中学部が先にインター校に伺い、授業参観を行った。フレンチインター校は、生徒の学年の幅が広く、授業の内容もさまざまだった。フランス語で行われる理科の授業、英語で行われる詩の授業と、日本とは違う様子に興味をもった。インター校は生徒たち一人ひとりがパソコンをもっており、授業や課題もパソコンで取り組んでいる。先生の話聞き、質問を交えながらパソコンに向かって課題に取り組む生徒の姿を見て、日本とは違う授業形態を学ぶことができたように思う。

これらの交流は、研修部が中心となって企画し、現地採用の香港人スタッフや香港人の先生が交渉して成り立っている。

4. 成果(派遣教員として得たもの)

まずは、このような機会を得たことに感謝したい。海外に住み、海外で仕事をするの大変さがよくわかった。ある生徒の保護者が言われたことが心に残っている。「子どもたちは好きでここにいるわけではない。親の都合で日本を離れることになっているのだ。」個人的には、なかなか得られない貴重な機会ととらえていたので、生徒たちにもその貴重な機会を生かしてほしいと考えていたのだが、そのような甘い考えではこの生徒たちとは向き合えないと痛感した。日本にいれば考えなくてもよいこと、進路に対する不安など、実際に向き合ってみなければわからないことだった。派遣教員はそのような思いを持つ生徒や保護者と向き合い、思いを受け止め、支えていく大きな役割があると感じる。

一方で、「3」でも挙げたが、現地校との交流や現地生徒、大学生との交流など、日本ではできない教育活動を体験できた。現地校は香港人だけでなく、さまざまな国にルーツを持つ生徒がたくさんいて、国際交流の意義や大切さを学び、視野を広げることができたように思う。

全国の教員と仕事をすることも有意義な経験となった。学校や地域が違っていると指導や考えも違うのかと思っていたが、逆だった。さまざまな指導に対するぶれない軸、取り組みへの熱、悩み、一緒であった。また、香港人スタッフやいろいろなルーツを持つ英語スタッフなど、日本人学校の中だけでも大いに国際交流ができた。

日本に戻り、今回の経験を生徒や同僚にどう還元していくか。今後の大きな課題となった。香港でも日本でも忙しい日々だが、何らかの形で生かしていきたい。

1 シンガポール共和国の概観

シンガポールはマレー半島の先端に位置する都市国家で、赤道から 140 キロ北に位置している。1819 年に英国人のスタンフォード・ラッフルズ卿によって開かれた土地で当初は英国の植民地であったこと、交通の要所であったことなどから昔から極めて国際的な国だった。

シンガポールは議会共和制で世界でも最も汚職の少ない国のひとつとして知られている。人種的には中国系（74%）、マレー系（13%）、インド系（9%）と多彩で、公用語も英語、中国語、マレー語、タミル語の 4 言語が採用されている。面積は、約 720 平方キロメートルで東京 23 区と同程度と言われている。宗教も仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教などがある。それに伴って、お祭りや祝日等も異なる。

19 世紀になるとイギリスの植民地支配が始まり、海洋交易やゴムなどの生産として発展を遂げて多くのアジア諸国からの移民が移住してきた。20 世紀には第二次世界大戦中に日本軍に占領され、大戦終了とともにイギリスの支配が再び始まった。シンガポール内での独立運動が激化し、1965 年にマレーシア連邦から追放されることでシンガポールは独立を果たした。いくつもの宗主国、多数の移民により持ち込まれた文化が熟成したのが、現在のシンガポール文化である。

シンガポール建国の父、リー・クワンユー氏は、東南アジアの中心、マラッカ海峡の交通の要衝としての立地を活かし、シンガポールを世界経済のハブにまで押し上げ、いまやシンガポールの一人当たり GDP は、日本を上回るまでになっている。1950～60 年代は、国民の貯蓄促進と住宅開発に注力し、リー・クワンユーは、他の国から必要とされる国になるためには、まず国民一人ひとりが自立し、社会的責任を担える健全な精神を養うことが重要だと考えた。そのために、安定した生活基盤が必要であり、給与から一定割合を国が天引きし、強制的に貯蓄させる制度を導入した。国が良質な住宅(HDB)を大量に供給し、多くの国民が貯まったお金を頭金にマイホームを持てるようにした。そして、子供の世代に依存しなくても生活していける社会環境を実現した。70～80 年代に入ると、中国語や英語教育に力を入れた。60 年代に大量輸送計画を立案し、道路交通網を整備するとともに、都心部にはエリア・ライセンシング・スキームを導入し、ライセンスを購入した車しか入れないようにし、車を所有するためのコストは跳ね上がった。そのおかげで、渋滞のない都市を実現することに成功した。こうした政策のおかげで、シンガポールのチャンギ空港に着いてから都心部のオフィスまで約 30 分という状態が実現している。また、英語を話せる人材を簡単に採用できることから、多くのグローバル企業がシンガポールにアジア本社を置く理由になっている。悪名高いチューイングガム禁止令が導入されたのもこの頃である。さらに、2000 年代に入ると、セントリーサやマリーナ・サンズに代表されるような総合リゾート開発に乗り出し、経済力をつけたアジアの観光客や富裕層をシンガポールに呼び込むことになった。

2 シンガポール日本人学校小学部チャンギ校の概要

日本との国交樹立を機に 1966 年に日本政府予算で正式に学校が開校された。1995 年チャンギ校新設校舎完成により、日本人学校小学部クレメンティ校、チャンギ校、中学部の 3 校体制となった。約 30 台の台のスクールバスで 30 分から 1 時間かけて約 920 児童が通っている。（学級数 36 学級）広大な芝のグラウンド、二階建ての体育館、高、低学年用のプールテニスコート等がある。各クラスは、冷房完備で、wifi 環境が整い、iPad があり、高学年一人一人には、クロムブックが貸与されている。職員は、英会話スタッフ約 20 名を加え、約 70 名となっている。



3 特色ある教育実践

チャンギ校の教育目標は、『持続可能な社会の担い手として、夢を抱き自らの可能性を伸ばし、豊かな国際感覚をもち世界の人々となつなろうとする子～通って楽しく卒業して懐かしい「学びのふるさと」～』とし、その実現のために次の6つを教育の柱として取り組んでいる。

1. 「生きる力」を育むための基礎、基本の徹底
2. 英語教育の充実
3. 国際理解教育と現地校交流の推進
4. ICT教育の充実
5. 特別支援教育の充実
6. 家庭、地域との連携

中でも英語教育の充実においては、フォニックスを取り入れた指導、イングリッシュスタッフと学級担任（日本人）による T.T、実際の社会生活で使える英語獲得のための場の設定（アクティビティルーム）など、工夫された授業展開をしている。また、現地校との交流や1日ホームステイなど、児童が英語や異文化に触れられる機会が設けられている。昨年度から CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）を取り入れている。イングリッシュレポートを作成し、保護者へ習熟度の評価を知らせ、英語教育への期待が高まる中、チャンギ校では、英語教育を推進している。

国際理解教育にも力を入れており、1，2年生は、現地校との交流会があり、3年生はシンガポール島内探検やウェットマーケット探検、4年生では、チャイナタウンやアラブストリート探検など、5年生では、ホームステイや音楽会へ招待、6年生ではマレーシアへの修学旅行、それぞれの学年の総合や英語教育で国際理解に触れる機会が多くある。また、日本がシンガポールを占領していた事実について高学年は、ナショナルミュージアム、日本人墓地の清掃、チャンギミュージアムの訪問などで学び、戦争の傷跡に心を痛め、これからの世界平和について考えている。

4 成果（派遣教員として得たこと、感じたこと）

日本人会の史蹟史料部に所属し、月1回シンガポールについて学んだ。寺院や日本人墓地などを訪問したり、シンガポールの樹木や食べ物についての本を発行するために調べたりした。多民族国家のシンガポールでは、それぞれの宗教に関しての行事や食べ物があり尊重し合って仲良く生活していることを実感した。シンガポールの歴史を学ぶことで、日本との深いつながりを知った。歴史を学ぶことはそれぞれの国を理解する上でとても大切なことだと思った。物価が高いことで知られるシンガポールだが、公共の交通機関は安く、者が増える日本も参考にすべき所はたくさんあると感じた。日本を離れたからこそ分かる日本の良さも感じた。各学年の校外学習は、事前調べも貴重な体験になり、学ぶことが多かった。これからのグローバル社会に適應できる子どもたちを育てるために、英語教育はもちろん大切だが、相手を尊重し相手を理解するコミュニケーション力が大切だと思う。個性豊かな教職員の中で、7クラスを学年主任としてまとめたことは、貴重な経験となった。これから、日本の子どもたちに色々な体験談を伝え、世界で活躍する子どもたちを育てていきたいと思う。



1 赴任地の概観

パラグアイ共和国は、南アメリカ中央南部に位置し、ブラジル・ボリビア・アルゼンチンに囲まれた内陸国である。日本と同程度の面積と千葉県と同程度の人口である。国際通貨基金の名目 GDP ランキング（2018年）では、93位であった。主な産業は、農業や牧畜業である。日本から多くの人々が移住し、南米の中では今でもブラジル、ペルーについて日系人の数が多い。国内にはイグアスやピラポなどいくつかの日系移住地があり、農業を中心とした各分野で日系人は大きな影響を与えてきた。また、日本食やアニメ・漫画なども人気で親日国の一つである。首都アスンシオンは、姫路市と同程度の人口である。近年発展がめざましく、海外企業の進出や大型ショッピングモールの建設などが進んでいる。

2 赴任校の概要

アスンシオン日本語学校は、主に日系人子弟を対象に日本語や日本文化を教える学校であり、幼稚園から高等部まである。さらに平日と土曜日に分けられ、平日は3コマ、土曜日は5コマ授業を行っている。私が主に関わっていた小学部の平日は約20名、土曜日は約80名程度在籍していた。基本的には、日本で使用されている国語教科書（主に光村図書）を使用した授業を行っている。加えて、能力別の日本語の授業や毛筆・よさこい・算盤など、日本文化を取り入れた授業も行っている。また、各節句や運動会・学習発表会など日本の学校で行われている行事も行なっている。教員は、移住してきた日本人4名ほどいるが、半分以上は現地の日系人の方達である。先生方や平日の子どもたちの多くは日本語を流暢に話し、校内でスペイン語を使うことはほとんどなかった。しかし、現在全日制の学校が徐々に増えていることやスペイン語や英語が重視されていること、土曜日ということで他の行事や家の都合と重なり欠席する子どももおり、土曜日ではスペイン語を使用することも多かった。

3 活動内容

(1) 日本語学校にて

①担任・各担当としての授業

アスンシオン日本語学校では、担任として1年目は平日小学2年生、土曜日中学1年生、2年目は平日小学1・6年生、土曜日小学1年生に授業を行った。平日の子どもは、ある程度日本語の力がついていたので、国語の授業のように、人物や事象の関係性を考えたり、音読劇を行ったりした。土曜日、特に1年生は日本語の力がほとんどついてないが多かったため、文字指導やかかるた・ゲーム・歌などを通して日本語に親しむ授業を中心に行った。

また、書写・運動会の表現担当として授業を行った。書写では、子どもが毛筆を使う機会はパラグアイではほぼ皆無なので、基礎からゆっくり授業を進めた。2年目は多く年間授業数が確保できたので、墨絵や文字のデザインなど芸術的要素も含めた授業を行った。運動会では、縄跳びを使った表現を指導した。そもそも縄跳びを跳ぶこと自体もあまり経験がない様子であったが、個人練習、基礎練習の時間も毎回の授業で少しずつ確保し、技術の底上げを図った。2年目には音楽やダンスも取り入れた演目ができあがった。

②図書・情報担当

担任以外の校務分掌として、図書と情報を担当した。アスンシオン日本語学校には、寄贈していただいた日本語の書籍が多数存在し、かなりの蔵書数であった。加えて、日本・世界の童話や日本の文豪たちの著名な作品も多くあった。しかし実際には、日本語のレベルが高く、誰にも読まれていない書籍や破損・落書きがひどく、読みにくい書籍などが多く、小学・中学部を対象の中心にした図書館としては使いやすいう図書室とは言い難かった。そこで、状態の悪い本を処分し、レベルに応じた本・新しく寄贈していただいた本・購入した本がわかりやすくなるように配置をするよう整理をした。整理をしていく上で、私が主となりながらも継続した活動ができるように現地の先生と担当者会を設立した。月例で会議を行い、「担当者の業務進捗状況の把握」、「議論すべきこと」、「今後の計画」の

3本柱で進めた。「できるだけ会議をシンプルにすること」「計画・振り返りを実施すること」を重視した。その理由として、会議を負担にしないということと、活動の効果を実感してもらいたかったからである。担当者活動を進めていく途中で、子どもたちの実態について話が盛り上がり、時間が長くなってしまいうこともしばしばあったが、特別活動や会議の重要性を認識してもらえたと思う。実際に、現在でも継続して担当者会を開いていると聞いている。

情報担当としては、日本から入ってきた事務機器やパソコンがあったが、使用方法がわからなかったり、使いにくさの部分から置物状態となったりしているものも少なくなかった。そこで、事務機器の基本的な操作方法や実際の現場でどのような時に使うと効果的かを研修として行った。特に、ラミネーターや一度に大量のプリントをスキャンできる機器については、先生方も興味を示し、積極的に使用していた。

また、アスンシオンはスマートフォンの普及が著しく、教員内では100%の所持率であった。加えて、学校には3台パソコンがあったため、より活用できないかと考えた。まずは、スマートフォンのアプリケーションを使い、会議で使う文書・議事録などの共有をした。これにより印刷物の削減や迅速な情報共有ができるようになった。パソコンでは、先生たちが持っている情報（提案文書、ワークシートやテストなど）を校務データとして管理し、誰でもアクセスできるようにした。これにより、データの所在がはっきりとし、次の年度の参考資料にできるようになった。アプリや校務データの整理は派遣期間の終盤から始めたため、私の派遣期間中に定着するところまではいかなかったが、このような情報機器の活用は今後、先生方の業務改善につながり、研修や教材研究に費やす時間が創設できると考えた。またひいては、「首都と地方」「富裕層と貧困層」といった教育格差を解消していくヒントとなると考えられる。

③ゲストティーチャーを招聘した授業

私が行った授業などではないが、首都に学校があるということもあり、日本人学校の先生方とは長い間、運動会や学習発表会に行き来する関係ができていた。加えて年に2、3回合同で授業を行う。形態はその時によって異なるが、日本人学校の先生が日本人学校・アスンシオン日本語学校で授業を師範してくださったり、一緒に授業を考えてくださったりしている。また、日本から研修や視察で来る先生方の授業、サッカーのユース選手との交流、アスンシオン近郊に住んでいる協力隊隊員の授業など、バラエティに富んだ講師たちと連携を取り授業を行っている。

(2) その他

その他、各種研修において講義を行った。パラグアイの日本語学校で働くために教員としての資格は必要なく、それぞれの教員（と言っても多くは学生や主婦）がそれぞれ工夫をして授業を行っていた。そのため、日本のように教員ならば知っている基本的な知識や技術に欠けていることがあり、それらを補完するために講義を行った。

4 成果（派遣教員として得たもの）

瑣末な部分で言えば、第二言語を学習していくプロセスを直に見ることができた。教科の目的は異なるが、日本でも外国語教育に関する状況が変わってきているので、アスンシオン日本語学校での取り組みは非常に良い経験となった。家庭での主な使用言語が日本語である場合、子どもの日本語が定着している傾向があるように感じた。やはり、どれだけ日々使用するかが大きな要因となるのだろう。しかし、セミリンガルになってしまう可能性も孕んでいるために、第一言語のしっかりと習得することの重要性を感じた。また、言語は文化と非常に密接な関わりがあることを感じた。そこで、日本では授業の中で英語を教えるだけでなく、文化と言語の関わりなども伝えられたらと思う。

大きな部分で言えば、文化が違う中では、自分のしたいことや考えていることを伝えたり、相手の伝えたいことを理解したりすることは日本以上に配慮を要した。「日本で当たり前」「先生ならば当たり前」といったことが通用しない部分が多くあるため、「誰でもわかるように」ということを重視した。そのような偏見や先入観なく、「相手に合わせて」を考えていくことは、今後日本でも必ず役に立つと思う。

プラハ日本人学校に赴任して

神戸市立摩耶小学校 黒田 智広

1. 赴任地の概観

チェコ共和国 (Česká Republika)、通称チェコは、ドイツ、ポーランド、スロバキア、オーストリアと接し、ヨーロッパのほぼ中央に位置する海のない国である。西部のボヘミア地方と東部のモラヴィア地方の二つに大きく分けられ、人口約 1060 万人、面積約 7890 k m² (北海道と同じくらい) で、ボヘミア盆地を中心に全体的になだらかな丘陵が広がっている。1918 年、チェコとスロバキアはオーストリア・ハンガリー帝国から、チェコスロバキア共和国として独立した。進んだ技術で工業を中心に発展をとげてきたが、1939 年から 1945 年にかけて第二次世界大戦にまきこまれ、ナチスドイツに支配される。第二次世界大戦以降、ソ連に支配され、社会主義時代をすごすが、1989 年のビロード革命により、チェコスロバキア共和国として独立をはたす。1993 年に円満離婚をはたし、チェコとスロバキアに分かれた。昨年で独立 100 周年、今年で日本との国交回復 60 周年を迎え、チェコ国内で多くのイベントが行われている。



2. 赴任校の概要

プラハ日本人学校は、「プラハ 17 区 - Řepy (ジェピー)」という地区にある。1972 年に在チェコ日本国大使館の中に補習校が開かれ、1980 年に日本人学校として開校した。5 度にわたって校舎を移転し、現在の校舎に至る。現在、児童生徒数が 109 名で、転出入も多いが、全校 100 人前後の小規模校である。

教育目標「自ら学び共に学ぶ、豊かな心と国際性あふれる たくましい児童生徒の育成」、めざす児童生徒像「かしこい子 やさしい子 たくましい子 世界で生きる子」と定め、小中一貫校として、児童生徒会を中心に、小中垣根なく関わり合える活動を設定している。登下校では、小 4 までは保護者による送り迎えだが、小 5 以上は自分で登校している児童が多く、治安も良好な方だといえる。

3. 特色ある教育実践

(1) 国際性豊かな子供たちの育成に向けての活動

① 現地校との交流

国際理解教育の一環として、小中全学年が現地校との交流を積極的に行っている。同学年同士での交流をメインとし、互いの学校を訪問しながら、年に 2 回以上を目指して行っている。各国の文化の紹介だけでなく、各学年の発達段階に応じた、授業を通じた学習交流も積極的に行っている。特に、近隣 3 校 (ペジナ基礎学校、ヴェリヒ基礎学校、ラウドヴァ基礎学校) との交流は盛んで、児童は英語やジェスチャーを使って積極的にコミュニケーションをとろうとする。



② 校外学習 (ウォークラリー、クリスマスマーケット、修学旅行)

9 月、2 学年ごとで縦割り班を作り、街散策を行う。小 1・2 はプラハ城とマロンストランスカー (城下街)、小 3・4 はヴィシエフラッド (旧王城)、小 5 は旧市街・新市街、中学部は郊外の歴史地区を訪れる。どこも生活科やプラハ (総合的な学習の時間) に学習する内容と関係する場所であり、既習事項を確かめるためウォークラリー形式で問題を解きながら散策する。また、小 6 はドイツの Dresden、中 2 は Berlin、Potsdam を訪問し、平和学習について学ぶ。

(2) 地域貢献活動

① Lidice (リジツェ) 平和祈念式典への参加

毎年 6 月 10 日に、「Lidice 平和祈念式典」という平和を願うイベントが行われ、日本人学校の児童生徒も参加する。チェコの大統領をはじめ、各国大使が参列して献花したり、チェコの 14

州の代表合唱団が集い、平和を願うための合唱祭が行われたりする。日本人学校では、全校生で作った千羽鶴や折り紙の花束を贈呈したり、小5以上の児童生徒が合唱祭に参加したりすることで、戦争により亡くなった戦死者を追悼すると共に、世界平和を祈念する。

② カレルボロメイスキー修道院への訪問

毎年、日本人学校の近くにある修道院へ小学生が訪問し、高齢者の方々と触れ合っている。低学年が浴衣を着て昔遊びを一緒に踊ったり、童歌を歌ったりする他、高学年が福祉の一貫でチェコ語の童歌や伝統舞踊を発表したり、折り鶴をプレゼントしたりする。言葉が通じなくても、笑顔で握手したりハグしたりしていて、毎年、多くの喜びのメッセージが届く交流となっている。

③ 現地校での日本語授業

毎年16コマ（4コマ×4日間）、日本人学校教員が現地校を訪問し、日本語指導を行う。小5から中2を対象に、英語で授業を行う。児童が興味の高いアニメや着物の他、かるたや手拍子ゲームなど、ゲームを手立てとし、日本語での挨拶や会話（「話す・聞く」）、体の言葉や伝統的行事、かな文字や漢字（「書く」）についても指導する。



(3) 校内活動

①外国語（英語、チェコ語（チェコ文化理解））の授業

ALTによる英語の授業が週2回行われる。ALTが4人いて、各学年4グループに分かれて行われるため、1グループ4～6人の少人数指導となっている。また、英語のレベルに応じてグループ編成を行っているため、児童・生徒の能力別に指導する。また、日本人教員がTTとして入るため、英語が苦手な児童も主体的に取り組む。

② 地域に根付いた行事（運動会・学習発表会）

運動会は、サッカー場を貸し切って行われる。日本の小学校同様、走競技や団競、表現等を行う。特に、チェコの伝統舞踊を取り入れた表現や地域の方々も参加できるオープン種目などを行うことで、地域との関わりを大切にしている。学習発表会は、オペラ劇場を貸し切り、各学年で学習してきた内容を劇やミュージカル等を通して発表する。



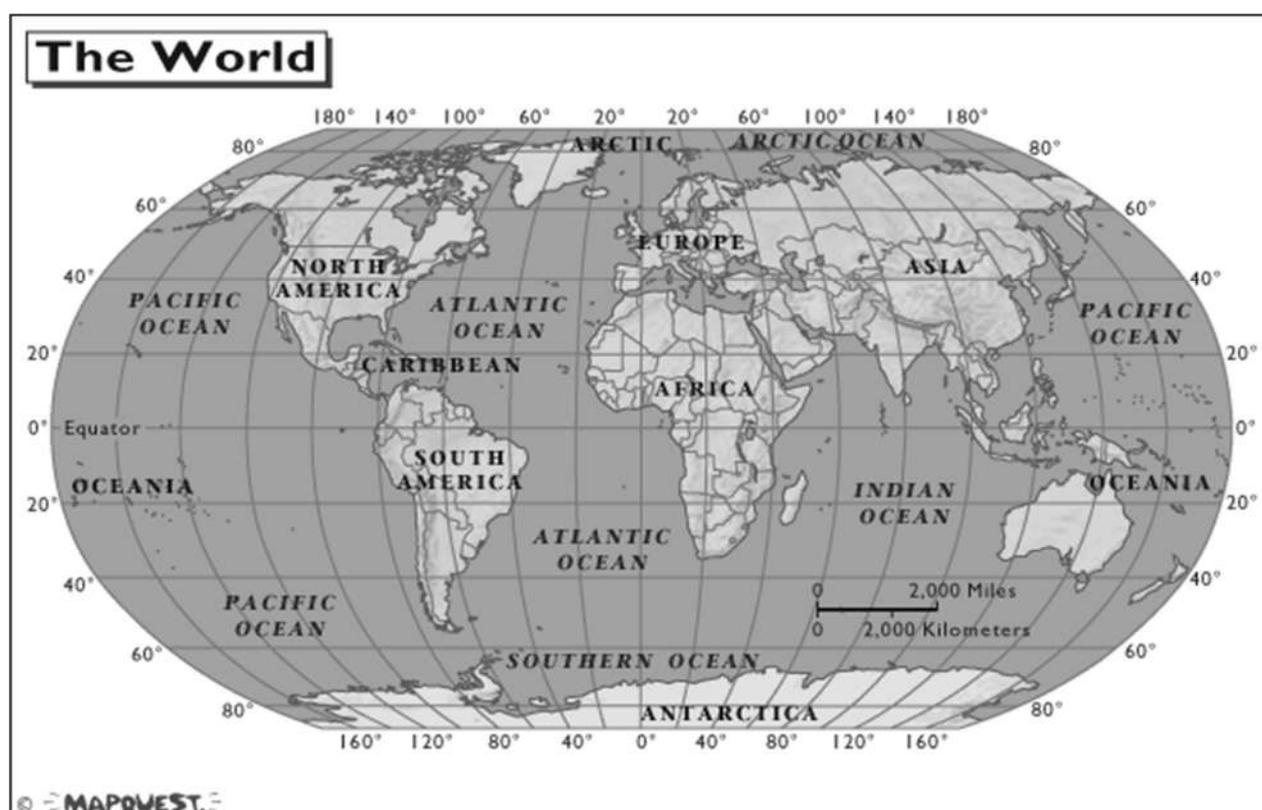
③ 総合的な学習の授業「プラハ」と副読本「プラハ」

小3から中3まで系統的にチェコのことを学ぶ。ジェピーやプラハ、チェコの地理や歴史、人々の生活、チェコの偉人、戦争についてなど、教科書には載っていない内容を学ぶため、日本人学校教員で作成した副読本「プラハ」を使って学習する。

4. 成果

プラハ日本人学校に赴任し、自分の感性や見識が磨かれたように感じる。言語や人種、宗教、思想等が異なる人たちと接する中で、これまでの自分が画一的で狭い世界の中で生きていたことを実感した。人と人の心をつなぐのに、言葉や思想の違いなど関係ない。チェコでは、知らない人にも気軽に挨拶をかわす。歩行者に道を譲る。動物を大切に、共生する。それが自然にできることで、日本以上に人との心の距離が近く、穏やかな雰囲気になるのだろう。それはEUという国境がなく、もの・サービス・人の行き来が自由な環境が影響しているのかもしれないが、気軽に街の中で挨拶が飛び交うチェコの雰囲気が大好きであり、日本の子どもたちにもそんな価値観、行動力、人との付き合い方をしてほしいと感じた。これから日本でも国際化・多様化が急速に進んでいくと思う。その中で大切なコミュニケーション能力として、英語も大切だが、どんな人でも受け入れる受容性・柔軟性が大切だと思う。3年間で出会った一人一人との出会いや日本ではできない経験の一つ一つが私にそう感じさせてくれた。今回の経験を日本の子どもたちに還していきたい。そして、国際性・感受性の豊かな子どもたちを育みたい。

《活動状況》



活 動 状 況 目 次

令和元年度 兵庫県在外教育施設派遣教員一覧	41
兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織	42
平成30年度 事業報告	43
平成30年度 多文化共生・国際教育セミナー実施報告	44
令和元年度 事業計画	45
令和元年度 多文化共生・国際教育セミナー計画書	46
兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則	47
兵海研 入会申込書	49

□■ H30年度 帰国者 ■□

おかえりなさい

■ 2016(H28)年度派遣 ■(派遣時22名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
耳田 由美子	ソカポール	ソカポール(チャゴ)	赤穂	尾崎小
藤谷 奈穂	ソカポール	ソカポール(中)	神戸	雲中小
加賀 悠士	タイ	バンコク	明石	清水小
森安 祥平	タイ	バンコク	多可	八千代小
肥後 綾子	中国	香港(中)	西宮	上甲子園中
飯塚 恵子	ベトナム	ハノイ	川西	緑台中
田中 良枝	マレーシア	ペナン	姫路	菅野中
渡辺 裕史	台湾	台北	神戸	玉津中
矢野 博之	コスタリカ	サン・ホセ	西宮	段上小
樹下 幸代	コロンビア	ボゴタ	播磨	播磨中
永田 博己	メキシコ	メキシコ【長】	姫路	シニア派遣
水井 廉雄	イタリア	ローマ【長】	篠山	シニア派遣
前田 隆吾	スイス	チューリッヒ	三木	上吉川小
村山 次郎	スペイン	マドリッド	丹波	芦田小
黒田 智広	チェコ	プラハ	神戸	魚崎小
織田 真弘	イラン	テヘラン	姫路	夢前中
稲中 伸彦	ケニア	ナイロビ	宝塚	宝塚中
祢津 明信	アメリカ	ニュージャージー【頭】	神戸	有馬中
中野 龍文	アメリカ	シアトル補【長】	篠山	西紀南小
増田 恵津子	インドネシア	ジャカルタ	明石	高丘中
大西 一人	中国	杭州【長】	神戸	白川台中
中田 公平	オランダ	アムステルダム	宝塚	宝塚第一小

□■ ただいま奮闘中 ■□

派遣3年目

■ 2017(H29)年度派遣 ■(派遣時25名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
篠原 功二	インドネシア	ジャカルタ	川西	北稜小
中村 陽希	タイ	バンコク	加古川	加古川中
林 由加子	タイ	バンコク	西宮	甲子園浜小
西村 一将	中国	天津	加古川	別府西小
河野 真也	中国	広州	南あわじ	三原中
吉田 菜由	中国	深圳	神戸	魚崎小
山本 佳奈	中国	上海(虹橋)	宝塚	丸橋小
加来 亮平	中国	上海(浦東)	西宮	上甲子園中
長江 麻里子	中国	蘇州	播磨	蓮池小
崎田 真宏	中国	大連	篠山	八上小
槇本 龍	フィリピン	マニラ	神戸	上野中
齊藤 真実	ベトナム	ホーチミン	神戸	渦が森小
白根 佐知子	アメリカ	シカゴ	明石	鳥羽小
久保田 信	フィリピン	グエフ・アリス	丹波	柏原中
岸本 紗矢子	フィリピン	グエフ・アリス	神戸	兵庫中
小野寺 裕美	ブラジル	マナウス	明石	山手小
北野 貴誠	イタリア	ミラノ日本人学校	尼崎	大成中
菅原 庸介	ドイツ	デュッセルドルフ	伊丹	天神川小
西尾 由紀子	ドイツ	デュッセルドルフ	加古川	綾南中
蔭地野 左智	ドイツ	ミュンヘン	西宮	大社中
古川 英治	ベルギー	ブラッセル【頭】	淡路	江井小
竹山 森汰郎	サウジアラビア	ジェッダ	相生	双葉小
仲 順也	カナダ	トロント補【長】	伊丹	シニア派遣

□■ ただいま奮闘中 ■□

派遣2年目

■ 2018(H30)年度派遣 ■(派遣時29名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
小林 悦子	インド	ニューデリー	たつの	室津小
宗倉 等	インド	ニューデリー	神戸	シニア派遣
加藤 裕章	インドネシア	ジャカルタ	宝塚	安倉小
田邊 晃子	インドネシア	バンドン	芦屋	宮川小
應供 亮生	ベトナム	ハノイ	豊岡	日高西
内田 琢也	ベトナム	ホーチミン	加古川	別府西小
倉垣 尚恵	ソカポール	ソカポール(チャゴ)	丹波	崇広小
尾鼻 祐也	中国	北京	宍粟	波賀小
内田麻杏舞	中国	上海(虹橋)	神戸	長坂小
村崎 千鶴	中国	上海(虹橋)	芦屋	シニア派遣
沖田真理子	中国	上海(浦東)	尼崎	シニア派遣
稲留 博史	マレーシア	クアラルンプール	尼崎	園田小
高崎 雅子	マレーシア	ジョホール	猪名川	猪名川中
福原くみこ	台湾	台北	神戸	長坂中
橋 真希	アメリカ	ニューヨーク	加古川	平岡北小
川邊 満久	メキシコ	アグアスカリエンテス	神戸	西郷小
原田 真弥	オーストラリア	ウイーン	神戸	蓮池小
清水 圭介	オランダ	アムステルダム	明石	山手小
東 明彦	スイス	チューリッヒ	丹波	シニア派遣
宮本千香代	イギリス	ロンドン	伊丹	摂陽小
小阪 学史	ロシア	モスクワ	尼崎	杭瀬小
井川 信也	オーストラリア	シドニー	三田	シニア派遣
衛藤 理佐	オーストラリア	シドニー	伊丹	天神川小
高田 顕子	オーストラリア	メルボルン	姫路	網干中
今井 省悟	カタール	ドーハ	伊丹	笹原小
富田 貴也	サウジアラビア	リヤド	川西	東谷中
荻野 俊也	チェコ	プラハ	丹波	シニア派遣

□■ 本年度 新規派遣者 ■□

派遣1年目

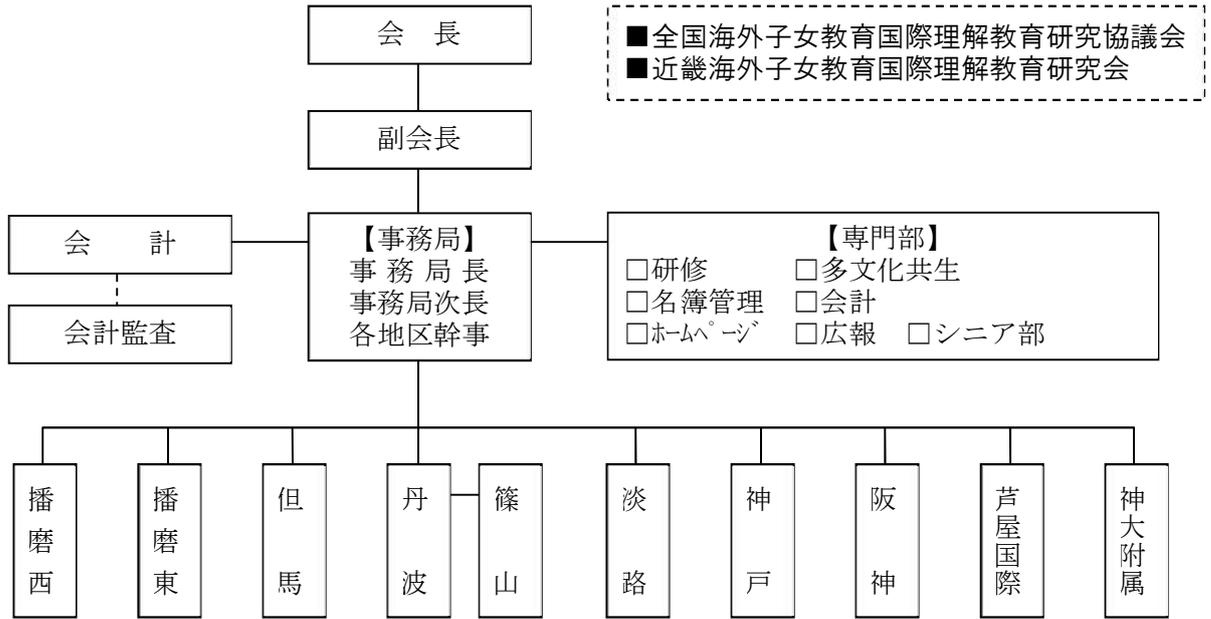
■ 2019(H31)年度派遣 ■(派遣時33名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
房村 亜矢	インド	ニューデリー	西宮	夙川小
北岡 良仁	インドネシア	ジャカルタ	川西	明峰小
岸本 久子	インドネシア	ジャカルタ	三木	広野小
北川 衛	インドネシア	ジャカルタチチカラン校	西宮	鳴尾中
小山 里枝	スリランカ	コロombo	神戸	桂木小
森 優太	タイ	バンコク	川西	多田小
石川 優	タイ	バンコク	淡路	西淡中
宮崎 雅文	タイ	バンコク	尼崎	立花南小
福岡 達郎	タイ	バンコク	西宮	樋之口小
三浦 亜紀	中国	北京	伊丹	笹原小
神谷 早希	中国	天津	神戸	こうべ小
枝廣 直樹	中国	広州	尼崎	尼崎北小
植垣 和久	中国	上海(虹橋)	西宮	深津小
大野 元気	中国	上海(浦東)	西宮	山口中
原田 善一	中国	杭州	明石	高丘西小
上玉利友美	中国	香港(大埔)	宝塚	すみれが丘小
久保 有基	中国	香港(大埔)	明石	山手小
山野 陽子	フィリピン	マニラ	赤穂	塩屋小
齊内 慎一	マレーシア	クアラルンプール	西宮	津門小
日下部 望	マレーシア	ジョホール	西宮	生瀬小
江籠 千絢	マレーシア	ペナン	明石	明石小
関口 浩之	台湾	台北	淡路	広田中
山本紗矢佳	台湾	台北	神戸	春日野小
太田 裕志	カンボジア	プノンペン	養父	関宮中
緒方 靖子	アメリカ	シカゴ	神戸	布引中
吉田 耕平	アメリカ	ニュージャージー	多可町	中町中
春名 祥吾	ブラジル	マナウス	尼崎	水堂小
庄司 幸三	メキシコ	アグアスカリエンテス(頭)	尼崎	シニア派遣
望月 優生	メキシコ	グアナフアト	姫路	城乾小
猿澤 夏美	スペイン	バルセロナ	尼崎	立花北
松田 拓	UAE	アブダビ	神戸	鷹取中
山田 祐史	シンガポール	シンガポール中学部	県立高	香住高
田中 陽介	パキスタン	イスラマバード	明石	魚住中



令和元年度

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織



会長	高木 浩志	事務局長	塚本 与久	
副会長	大月 祐三(研修)	事務局次長	中井 治嗣(組織・渉外)	
	小畑 幸一(組織)		小池 宏尚(渉外)	
	足立 浩(研修)		原田 英聖(研修)	
	八幡 良一(帰国報告会)		小嶋 拓也(研修)	
	松本 肇仁(帰国報告会)		徳野 雅信(研修)	
	島多 峰史(研修)		二谷 洋平(組織)	
	田中 秀滋(研修)		松田 一樹(組織)	
会計	二谷 洋平		名簿管理	中井 治嗣
研 修	上坂 浩一(帰国報告会)		ホームページ	二谷 洋平
	小谷 仙嘉(帰国報告会)			原田 英聖
	中澤 大樹(セミナー)	小池 宏尚		
	田中 秀滋(セミナー)	広 報	佐々 順子	
山下 昌裕(セミナー)	西口 美希			
多文化共生 (教育相談)	貞松 千佳子			
監事	小池 宏尚			
	照本 忠光、中馬 義治			
シニア部	照本 忠光			
	宮田 正彦			

地 区 幹 事			
神 戸	徳野 雅信、榎戸 二郎	播磨西	檜野 正樹、小谷 仙嘉
阪 神	岡坂 隆志、山村 裕二、稲中 伸彦	播磨東	水田 良
丹 波	梅垣 泰三、伊藤 憲司、西田 隆之	但 馬	中沢 泰明、大月 祐三
篠 山	浅田 智之、中野 純也、五十川 聡	淡 路	美濃 正明、立田 和弘
芦屋国際中等	貞松 千佳子	神大附	藤中 寛子

顧 問	谷口 哲、生野 康一、橋本 力、茶谷 紀元、青木 芳信 横田 政美、西田 富男、水岡 俊一、串光 宏治、森本 孝、永田 博己 桝田 邦夫、丸山 一則、中馬 義治、宮田 正彦、照本 忠光、水井 廉雄		
海外幹事	藤本 孝仁、仲 順也、東 明彦、庄司 幸三		
全海研顧問	生野 康一	全海研副会長	高木 浩志
全海研事務局次長	原田 英聖	全海研研修担	事務局長

平成30年度 事業報告

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会(千葉大会)への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会(滋賀大会)への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会・歓迎会 5/5(土) 兵庫県民会館
- (2) 帰国報告会 6/16(土) 姫路市市民会館
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（派遣志望者研修会）

第1回	5/5(土)	『海外子女教育の概論』	(場所:兵庫県民会館)
第2回	6/16(土)	【帰国報告会】	(場所:姫路市市民会館)
第3回	10/27(土)	【近畿ブロック大会】	(場所:滋賀県)
第4回	12/22(土)	『在外教育事情緊急報告』	(場所:県立のじぎく会館)
第5回	2/23(土)	『保護者の目・派遣OBを交えて』	(場所:県立のじぎく会館)

 その他、各地区の研修会
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会…各地区の特色を生かして 「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
 - 会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
 - 会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後HP上で（またはデジタル化）発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携
- (9) 全海研本部との連携 全国大会（千葉:千葉教育会館） 8/9(金)～11(土)
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・ 各市町教育委員会
 - ・ 兵庫県国際交流協会
 - ・ 帰国子女教育を考える会
 - ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・ （公財）海外子女教育振興財団関西分室
 - ・ 関西帰国生親の会かけはし
 - ・ 兵庫OV教員研究会

平成30年度 多文化共生・国際教育セミナー報告書

下記の表のように5回の研修会を行いました。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月5日（土） 14：00～17：00 兵庫県民会館 （神戸市中央区下山手通4-16-3）	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：足立 浩
第2回	6月16日（土） 10：00～17：00 姫路市市民会館 （姫路市総社本町112番地）	帰国報告会 2017年度帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告 他
第3回	10月27日（土） 14：00～16：00 滋賀県立男女共同参画センター （近江八幡市鷹飼町80-4）	第29回近畿ブロック国際理解教育研究会 滋賀大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月22日（土） 14：00～16：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	「派遣教員に求められる英語スキル・学習指導要領改訂による小学校の外国語教育に求められるもの」 講師：田中 秀滋 「シニア派遣に向けて」 講師 照本 忠光
第5回	2月23日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

令和元年度 事業計画

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会（北海道大会）への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会（奈良大会）への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会・歓迎会 5/4(土) 兵庫県民会館
- (2) 帰国報告会 6/15(土) JICA 関西
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（派遣志望者研修会）
 - 第1回 5/4(土) 『海外子女教育の概論』（場所：兵庫県民会館）
 - 第2回 6/15(土) 【帰国報告会】（場所：JICA 関西）
 - 第3回 10/26(土) 【近畿ブロック大会】（場所：奈良県）
 - 第4回 12/21(土) 『在外教育施設での多文化共生について』（場所：県立のじぎく会館）
 - 第5回 2/22(土) 『保護者の目・派遣OBを交えて』（場所：県立のじぎく会館）
 その他、各地区の研修会
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会…各地区の特色を生かして 「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
 - 会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
 - 会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス <http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後HP上で（またはデジタル化）発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携
- (9) 全海研本部との連携 全国大会（北海道：旭川トーヨーホテル） 8/22(木)～24(土)
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・ 各市町教育委員会
 - ・ 兵庫県国際交流協会
 - ・ 帰国子女教育を考える会
 - ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・ （公財）海外子女教育振興財団関西分室
 - ・ 関西帰国生親の会かけはし
 - ・ 兵庫OV教員研究会

令和元年5月吉日

関係各位

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会
会 長 高木 浩志

令和元年度 多文化共生・国際教育セミナー計画

下記の表のように5回の研修会を計画しております。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月4日（土） 14:00～17:00 兵庫県民会館 (神戸市中央区下山手通4-16-3)	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：高木 浩志
第2回	6月15日（土） 10:00～17:00 JICA関西 (神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2)	帰国報告会 2018年度帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告 他
第3回	10月26日（土） 14:00～16:00 奈良女子大学 (奈良県奈良市北魚屋東町)	第30回近畿ブロック国際理解教育研究会 奈良大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月21日（土） 14:00～17:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通4-22-15)	内容:在外教育施設での多文化共生について(予定)
第5回	2月22日（土） 10:00～12:00 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通4-22-15)	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

上記の予定の変更点は、下記ホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス

<http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>

【お問い合わせ先】

兵海研事務局 中井 治嗣

Email: hyo1982kai@gmail.com

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則

■第一章■

第一条 本会は兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（略称；兵海研）と称する。

■第二章■ （目的および事業）

第二条 本会は国際的視野にたった海外子女教育および国際理解教育の充実発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 海外子女教育・国際理解教育に「関する研究の推進
2. 海外子女教育・国際理解教育にかんする研究会、交流会の開催
3. 海外子女教育に関する教育相談の実施
4. 会員相互の情報交換を行うための会報の発行
5. 在外教育施設に派遣中の教師に対する情報交換や援助
6. 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会との連携に基づく活動
7. その他 本会の目的を達成するために必要な事業

■第三章■ （会員）

第四条 本会の会員は在外教育施設に派遣された者および本会の趣旨に賛同する者で年会費を納入した者で構成する。派遣時に年会費を納入した者は、3年間準会員として本会から連絡等を受けることができるものとする。

■第四章■ （役員）

第五条 本会には次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 事務局長 1名
4. 事務局次長 若干名
5. 会計部長 1名
6. 専門部長 若干名
7. 地区幹事 若干名
8. 幹事 2名
9. 顧問

第六条 役員は総会において選任される。

第七条 会長は本会を代表し会務を総括する。

副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときはその任を代行する。

事務局長は本会に関する事務を行う。

事務局次長は事務局長を補佐する。

会計部長は本会の会計の事務を行う。

専門部長は各専門部の活動を推進する。

地区幹事は地区の会員をまとめ、地区の活動を推進する。

幹事は本会の会計を監査する。

顧問は必要に応じて置くことができる。

第八条 役員任期は1年とする。但し再任は妨げない。

補欠により選任された役員の任期は前任者の在任期間とする。

第九条 本会は事務局を事務局長の勤務場所に置く。

■第五章■ (機関)

第十条 本会に次の機関を置き、会長がこれを召集する。

1. 総会
2. 役員会

第十一条 総会は毎年1回召集する。但し必要に応じて臨時に召集することができる。
役員会は必要に応じてこれを召集する。

第十二条 総会は次の事項を審議する。

1. 事業計画
2. 予算および決算
3. 会則の変更
4. その他 必要事項

※緊急かつやむを得ない事情により総会を開くことができないときは役員会の決議をもってこれにかえることができる。この場合は該当事項について、次回の総会で承認を得なければならない。

第十三条 役員会は次の事項を審議する。

1. 総会での審議を要しない事項で、本会の運営に関する事項
2. 総会に提案する議案の検討
3. その他 会長が必要と認める事項

■第六章■ (会計)

第十四条 本会の費用は会費・寄付金・その他の収入をもってこれにあてる。

第十五条 本会の会費は年額3000円とする。

第十六条 本会の会計年度は、毎年総会に始まり、翌年の総会の前日に終わるものとする。

(この会則は昭和57年9月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、昭和62年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成元年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成3年6月2日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成8年5月25日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成9年5月24日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成11年5月8日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成15年5月10日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成24年5月6日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成30年5月5日から施行する)

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会(兵海研)入会のご案内

私たち兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（兵海研）は、兵庫県内の小中学校教員が中心となって組織している研究団体です。県内の国際理解教育や帰国子女教育・多文化共生教育、また、派遣教員による海外子女教育の充実・発展をめざして精力的に活動しています。ぜひ兵海研に入会し、一緒に学び合いませんか。

【 会員特典 】

- 兵海研が主催する各種セミナーに、無料でご参加いただけます。
- 兵海研からの情報（セミナー案内、派遣先関連等）を提供いたします。
- 兵海研の海外子女教育、国際理解教育に関わるネットワークにご参加いただけます。

【 主な活動 】

- 国際教育セミナー（在外教育施設派遣希望者研修会）
- 在外教育施設帰国教員による帰国報告会（海外教育事情等）
- 派遣教員激励会、帰国教員歓迎会の企画
- 近畿ブロック国際理解教育研究大会
- 在外教育施設派遣教員への支援活動
- 文部科学省内定者研修（東京）での兵庫連絡会
- 県内各地域での国際理解教育・多文化共生教育実践交流
- HPによる活動報告や国際理解教育関連の情報提供 等

【 会 費 】

年会費 3,000円（会場費や資料代に使用します）

※ ネットワークや案内情報に活用しますので、下記『兵海研入会申込書』と共に納入してください。

◆郵便振替 名義 兵庫県海外子女教育国際理解教育研究会

口座番号 0900-7-94943

【 連絡先 】

事務局 塚本 与久（ツカモト トモヒサ）

E-mail: hyo1982kai@gmail.com

西宮市立高木北小学校（〒663-8024 兵庫県西宮市薬師町7番5号）

TEL 0798-65-6572 / FAX 0798-65-6573

キリトリ

兵海研入会申込書

令和 年 月 日

お名前		現所属	
海外との関係		E-mail	

※ 海外との関係（例：H24～カラチ日本人学校 or 日本人学校に興味あり）